

古墳時代馬具における繫がいの基礎的研究

片山 健太郎

【要約】 本稿では古墳時代の轡や杏葉、雲珠や辻金具などを連結し、馬装として機能させるうえで重要な繫とよばれる有機質製ストラップについて基礎的整理をおこなった。これまで繫についての認識が不十分だったため、馬具研究の組上にあげられることはほとんどなかった。本稿では古墳出土の金属製馬具に残された繫の観察に基づいて、構造や裝飾技法の点から分類をおこなった。ついで、どのような馬具のセットに各種類の繫が確認できるか検討をおこない、連結された鏡板轡や杏葉などの金属製馬具の編年に基づいて繫の時間的消長について検討した。また、鏡板轡や杏葉の系列と、連結された繫の種類との間に相関があるかどうかを検討し、繫の消長が鏡板轡や杏葉などの金属製馬具の消長とも連動していることを明らかにした。繫は古墳時代馬具の変化、系譜問題、船載と模倣のプロセス、生産流通体制の変化を明らかにするうえで重要な馬具の一つである。

史林 九九卷六号 二〇一六年一月

はじめに

古墳時代に日本列島にもたらされた馬具は、轡や鞍、鐙など複数種をセットとして用いる複雑な器物である。個々の馬具を馬体に装着する際に重要な役割を担うのが本稿で取り扱う「繫がい」^①と呼ばれる有機質製ストラップである。

繫は皮革などを用いた有機質製品であるため、日本列島の古墳から良好な状態で出土することはまれである。機能上、

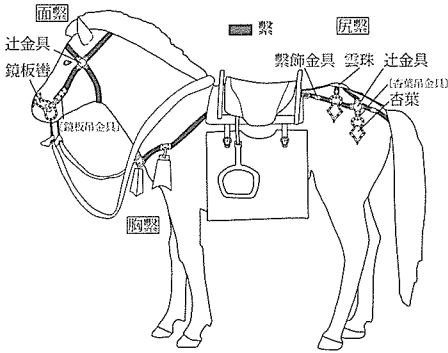


図1 馬具の部分名称と繋の位置

重要な馬具であるにも関わらず、資料としての認識、研究が進んでいない原因はここにある。しかし、繋に限らず、織物や木材、皮革や漆などの有機質素材と金属素材を組み合わせてつくられた鞍や鐙などについても、金具の丹念な観察と分析をすれば、有機質素材の種類や構造に関する多くの情報を引き出せる。筆者もこのような視点から、繋の連結先である金属製馬具に残された痕跡に繋の構造や材質、大きさについての情報を探りたい。また、冒頭でも述べたように繋は個々の馬具の連結に用いられることから、馬具のセットがどのように構成されているかを明らかにするうえで重要な手掛かりとなる。さらに、馬具の特徴は「セットであること」であるから、セットの構成の背景を探ることは個々の馬具の生産・流通解明への糸口となるであろう。

ここで馬具の部分名称と繋の連結のあり方を示しておく(図1)。馬装は鞍を中心に面繋^④、胸繋、尻繋の三繋から構成される。三繋はストラップである繋によって構成される。面繋では連結先である鏡板の吊金具^⑤の吊手や辻金具の脚部において繋を確認できる。尻繋についても同様に連結先である杏葉の吊金具の吊手、雲珠や辻金具の脚部において繋を確認できる^⑥。

また、本稿では繋の確認ができた具体例を提示する場合、出土した古墳名を用いる。複数セットが出土し、報告書や資料紹介などでセット名が付いている場合はそのセット名を使用し、付いていない場合は装飾性の高さ、各馬具の編年案に照らして古いものから順にアルファベット小文字を付け、これで提示する。なお、「Aセット」の「セット」や「A組」の「組」などは省略する。帰属するセットが不明の場合は具体的な馬具の種類を提示する。本稿で対象とする繋^⑦が連結される馬具(鏡板轡、杏葉、雲珠、辻金具)のセット認定においては、①一つのセット

に同じ役割の馬具は複数含まれない、②主要な対象である裝飾馬具では鏡板轡と杏葉の系列（デザインの違い）の認識がセットの認識上重要である、③特定の系列の雲珠や辻金具と特定の系列の鏡板轡や杏葉がセットを構成することが多い、という三つの大きな前提がある。本稿も基本的にはこれらの前提に立ち、個々の雲珠や辻金具について鏡板轡や杏葉とのセット関係を想定する。対象とする繫が鏡板轡や杏葉の吊金具に直接的に確認されなくても、セット関係が復元できるのであれば、先のセット関係復元の前提①～③に基づき、鏡板轡や杏葉の系列をもつてセットの特徴を示す。また、鏡板轡や杏葉、雲珠や辻金具以外の金具であつても、材質や鋳の規格、賣金具の共通性などから帰属するセットが判明する場合には、これらも特定のセットに帰属するものとして提示する。

- ① 「セット」という用語を馬具研究に用いた小野山節は、鏡板轡や杏葉、雲珠や辻金具にみられる形態やデザイン、部品の共通性を重視して、一つの馬装を構成するための各種馬具の生産時におけるまとまりの意味で用いた。小野山節「馬具と乗馬の風習半島経営の盛衰」（『世界考古学大系三日本Ⅲ』一九五九年）九〇頁など。しかし、以降の馬具研究では、横穴式石室などで出土する複数組の馬具を整理し、同時に用いられた組み合わせを復元するのに「セット」という用語が用いられることも多い。不破隆「馬具」「物集女車塚」向日市文化財調査報告書第三集、一九八八年、二三四—二三五頁など。本稿では後者の意味で「セット」を使用する。この用法は宮代栄一「五・六世紀における馬具の「セット」について——f字形鏡板付轡・鉄製楕円形鏡板付轡・劍菱形杏葉を中心に——」（『九州考古学』第六八号、一九九三年）一九頁。鏡板轡や杏葉、雲珠や辻金具については、筆者も形態やデザインなどの違いによる分類の単位が、生産上の何らかの単位も示していると想定する。筆者はこの分類上の単位を「系列」と称する。
- ② 「繫」という用語により面繫、尻繫、胸繫など三繫を構成するストラップを指すことは日本、韓国の馬具研究者の一部では定着しているが、有職故実では「繫」とはすなわち三繫もしくはこれを構成する面繫・尻繫・胸繫を指すことが多い。筆者の確認できた範囲で最初に本稿のような用い方を始めたのは宮代栄一であると思われる（『古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年』『日本古代文化研究』第三号、一九八六年）。また、本稿で用いる「繫」の音読みは「けい」とされるのが一般的である。しかし、これについても宮代は「古墳時代の面繫構造の復原——X字脚辻金具はどこにつけられたか——」（『HOMI NIDS』Vol. 1、一九九七年）五〇頁で「繫（がい）」とルビを振っており、「繫」と書いて「がい」とよむことは定着していることから、本稿でもこれに従う。
- ③ 諫早直人「馬具の有機質——七観古墳出土馬具の分析結果から——」（『七観古墳の研究』一九四七年・一九五二年出土遺物の再検討——、二〇一四年）。鞍については、宮代栄一や花谷浩の研究にこ

のような視点が認められる。宮代栄「古墳時代金属装鞍の研究――

鉄地金銅装鞍を中心に――」(『日本考古学』第三号、一九九六年)。

花谷浩「古墳時代鞍金具の取付方法とその変化について」(『日韓古代

における埋葬法の比較研究』、二〇〇〇年)。

④ 面繫は頭絡と同義であるが本稿では面繫を用いる。

⑤ 吊金具は鈎金具、釣舌金具、立開金具とも呼ばれるが、本稿では吊金具を用いる。

⑥ 李恩碩の研究では、鞍を馬体に固定するための腹帯を含めて繫の中で分析対象としているが、本稿では三繫を構成するストラップとして繫のみを対象とする。

第一章 研究史と本稿の視点

1 研究 史

繫についての研究は、個別報告を除けば、千賀久^①と李恩碩^②による研究に限られる。まず、二者の研究を振り返り、個別報告のうち主要なものについて触れておきたい。

(a) 千賀久の研究

千賀久は古墳時代の馬具の「革帯」について、「布張りの革帯」^③と「布を張らない革帯」があることを指摘し、五世紀末から六世紀の大和の古墳出土の馬具に多く用いられたのは「布張りの革帯」であることを指摘した。その中で、奈良県藤ノ木古墳の唐草文透彫心葉形鏡板轡と棘葉形杏葉から構成される馬具Aには「布を張らない革帯」が用いられたことを指摘している。また、群馬県綿貫観音山古墳の十字文心葉形鏡板轡と透彫心葉形杏葉から構成される馬具Aに用いられた

⑦ これに関連して、繫が各古墳の各セットの三繫のうちのどの馬具で

確認されるかを示すことは手続きとして重要であるが、本稿では基本的に三繫の区別を重視しない。現在までのところ、一つの馬装において、複数種の繫を面繫、尻繫などで使い分けたと思われる確実な事例が指摘できないからである。ただし、同一の馬装に用いられた面繫

と尻繫であったとしても、繫の幅の違いが想定される事例は古川匠によつて

すでに指摘されており、筆者も幅の違いのある同じ種類の繫が面繫と

尻繫にそれぞれ用いられた資料の存在には同意する。古川匠「六世紀における装飾馬具の「国産化」について」(『古文化談叢』第五七集、

二〇〇七年)。

繫についても同様に「布を張らない革帯」が用いられた可能性を指摘した。これらのことから、「新羅系」と「非新羅系」の各系譜の馬具の一群が、「革帯」についても異なつた特徴をもつていた可能性を示した。また、鏡板轡や杏葉そのものが新羅圏の工房でつくられたのなら、連結された「布を張らない革帯」についても新羅圏の工房での製品と考えた。こうした「布を張る革帯」と「布を張らない革帯」の二者の存在に関しては、皮革の加工技術に原因を求めた。すなわち「布は表面に張つたものなので、革の表面処理の不十分さを補うためのものではないか」と考えた^④。

(b) 李恩碩の研究

李恩碩は古代北東アジアの繫について基礎的整理をおこなつた。李は中国、モンゴル、韓国、日本などの紀元前三世紀から紀元後八世紀までの繫の分類を示した。李の対象とした資料には実物の繫のほか、伝世資料や中国の俑、韓国の騎馬人物形土器、日本の馬形埴輪に表現された繫なども含まれる。製作技法に由来する構造や形態によりA～Hの九型式に分類し、繫の幅に基づいて一～四の四類に分類した。

また、九型式のうち八型式が両側縁を折返し、中央で縫い合わせる技法をとることを指摘した。さらに、繫の幅についても考察し、時間の経過とともに幅広になることを指摘した。

(c) 個別報告の事例

戦前においても、繫の残存状況が良好な場合、個別報告がある。福岡県寿命王塚古墳a例（十字文楕円形鏡板轡と三葉文楕円形杏葉のセット）は、繫の中が空洞であることから「布」を芯にした繫である可能性が梅原末治・小林行雄により指摘され^⑤、大阪府海北塚古墳b例（十字文心葉形鏡板轡の祖型と三葉文心葉形杏葉の祖型のセット）は、辻金具に留められた繫が皮革製であることが梅原により報告された^⑥。

戦後になると、小野山節により神奈川県室ノ木古墳B（双葉文楕円形杏葉のセット）の飾金具に残る痕跡から繫は「布の丸桁帯」であつた可能性が指摘されており^⑦、その後刊行された東京国立博物館の目録では、この「布」が「錦」との報告

がなされた。^⑧ 奈良県石光山八号墳例(剣菱形杏葉のセット)は、繫の飾金具の縁に撚紐が付けられていること、革自体が麻布で包まれていることが角山幸洋により報告された。^⑨

一九八〇年代以降になると、千葉県江子田金環塚古墳例(f字形鏡板轡と鐘形杏葉のセット)は、雲珠や辻金具の裏面の写真が掲載され、繫の留められた状況や「皮紐」を「布」で包む技法、その「布」を綴じた「紐状の部分」についても報告がなされた。^⑩ 滋賀県鴨稻荷山古墳例(十字文槽円形鏡板轡と三葉文心葉形杏葉のセット)の再報告では、鏡板や杏葉、雲珠や辻金具に残された繫が「細い革紐を交互に組あげたもの」^⑪であることが指摘された。^⑫ 島根県上塩冶築山古墳A例(透十字文心葉形鏡板轡と透心葉形杏葉のセット)は、松尾充品により皮革製の繫の縁を飾る「組紐」の存在が指摘され、この技法についても説明された。^⑬ 愛知県豊田大塚古墳の無脚雲珠に関しては、初村武寛により付着した有機質が獣毛であるとの観察結果が示され、毛皮を用いた繫の存在が想定された。^⑭ さらに、保存処理等に伴って繫に係する有機質の顕微鏡観察などがおこなわれている。滋賀県田中三六号墳A例(鐘形鏡板轡のセット)の報告では、山岡奈美恵により鏡板吊金具や辻金具に付着した繫に係する「絨維製品」について、顕微鏡観察による織密度、織組織の報告がなされた。^⑮ 愛知県馬越長火塚古墳例(環状鏡板轡と棘葉形杏葉のセットか)は、山田卓司・小村真理により雲珠や辻金具の脚について、走査電子顕微鏡などを用いた観察がおこなわれ、皮革製繫に伴う組紐の存在が指摘され、色調や組み方の報告がなされた。^⑯

2 問題点と本稿の視点

研究史を概観してみると以下のような問題があげられる。千賀の指摘する「布を張る革帯」と「布を張らない革帯」を採用する馬具の具体例の提示は、奈良県を中心とするわずかな事例に限られるため、全国的な資料の観察が必要である。そのうえで繫の状態が良好な例に基づいて全体的な構造を復元し、バリエーションを把握することが必要である。複数種類の存在が認められる場合は属性に基づいた分類と編年研究が必要である。

本稿で扱う繫は、基本的に皮革を本体に用いたものに限る。たとえば、古墳出土品でも群馬県しどめ塚古墳の鉢形繫飾金具に「紐を編み込んで作られた布製」の繫の存在を示唆するものがあり、また、古代中世の寺社伝世の裝飾馬具では皮革を用いない繫も多数存在する。しかし、古墳時代の馬具に関しては現段階ではしどめ塚の事例に限られるためである。

- ① 千賀久「馬具に使用された革帯——藤ノ木古墳金銅製馬具の特殊性——」〔『古代学研究』第一八〇号、二〇〇八年〕。
- ② 李恩碩「고대 동북아시아계 (繫) 에 관한 연구」〔『中央考古研究』第二号、二〇一二年〕。
- ③ 「布」は一般的に植物繊維による織物のことをさすが、千賀はこの点については区別をしていないものと思われる。
- ④ 千賀は「馬具に使用された革帯——藤ノ木古墳金銅製馬具の特殊性——」〔前掲〕、二〇三—二〇四頁の中で、藤ノ木古墳の馬具Aに伴う蓋鑑に使われた皮革についても「布張りでない皮革であることを指摘しており、千賀の主張は繫に關してだけではない点に注意をしておく必要がある。
- ⑤ 梅原末治・小林行雄「発見の遺物」〔筑前国嘉穂郡王塚塚飾古墳〕京都帝國大学文学部考古学研究室報告第一五冊、一九三九年〕四八頁。
- ⑥ 梅原末治「撰津福井の海北塚古墳」〔近畿地方古墳墓の調査〕日本古文化研究所報告第四、一九三七年〕六三頁。
- ⑦ 小野山節「鏡形裝飾付馬具とその分布」〔MUSEUM No.三三九、一九七九年〕九一—一〇頁。
- ⑧ 村井崑雄・亀井正道『東京国立博物館図版目録古墳遺物篇関東Ⅰ』(一九八〇年)一八三頁。
- ⑨ 角山幸洋「石光山八号墳の馬具付着織物片の観察所見」〔葛城・石光山古墳群〕奈良県史跡勝天然記念物調査報告第三二冊、一九七六年〕四七〇—四七一頁。
- ⑩ 永沼律朗「馬具」〔『上総江子田金環塚古墳』一九八五年〕二二—二七頁。
- ⑪ 岡安光彦は鉄製環状鏡板轡の立開孔の変化から組綴の「大総」の存在の可能性を指摘している。岡安光彦「いわゆる「素環の轡」について——環状鏡板付轡の型式学的分析と編年——」〔『日本古代文化研究』創刊号、一九八四年〕一〇〇—一〇一頁。
- ⑫ 森下章司・高橋克壽・吉井秀夫「副葬品の再検討」〔琵琶湖周辺の六世紀を探る〕、一九九五年〕六八頁。ただし、註によれば、「松尾充晶氏の指摘による」ものである。
- ⑬ 松尾充晶「馬具」〔『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査報告四、一九九九年〕八七—八九頁。
- ⑭ 初村武寛「豊田大塚古墳出土雲珠と胡録金具に伴う有機質の調査」〔『豊田市郷土資料館だより』No.七〇、二〇一〇年〕六一—六七頁。
- ⑮ 山岡奈美恵「田中三六号墳出土馬具付着の纖維製品について」〔田中三六号発掘調査報告〕高島市文化財調査報告書第一四集、二〇一〇年〕五六—五八頁。
- ⑯ 山田卓司・小村真理「金銅裝馬具を科学する」〔『黄金の世紀』、二〇一一年〕一五三—一五四頁。
- ⑰ 外山政子・佐藤信孝「しどめ塚古墳」〔『榛名町誌』資料編一、二〇一〇年〕八三四—八三五頁。なお、「革帯」ではなく、「繫」という用語を用いるのは、このような本体が皮革製以外の繫の存在を考慮に入れていることである。

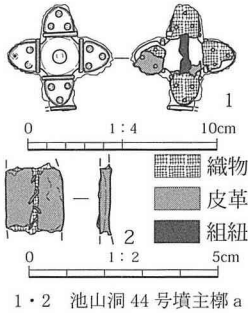


図2 織物芯繫実測図
(1はS=1/4、
2はS=1/2)

一方、皮革紐を何本か用いて組緒状にしたものがある。折返繫に比べて残りの悪い資料が多いが、雲珠や辻金具の脚部、吊金具の裏面の綾杉状の凹凸の観察によって確認できる(図4-1-3・4、矢印)。用いた紐の本数や製作方法には不明な点も多いが、平面で綾杉が確認できるものはこの組緒繫である。革紐の幅は約4mm程度で、厚みのわかるもので二〜三mm程度である。

第二章 構造・装飾からみた繫

1 繫の観察

繫の分類にあたっては、繫本体の構造と表面の装飾技法が注目すべき重要な属性である。

(a) 繫本体の素材と構造

繫として一般的なもの、一枚の幅広の帯状の皮革の両側縁を折返し、中心でつき合わせ、縫って筒状にしたものである。鉢状辻金具の脚部や、鏡板や杏葉の吊金具などで観察できる。繫の横断面を観察すると、上下二層の皮革が重なっている様子が見え、上下二層が一連の皮革である場合はこの折返繫と判断できる(図4-1、破線)。多くの場合、合わせ目の縫いは表側である金具に接する側で見られるので、二層の皮革のうち裏側の皮革の残りが良いものでは観察が困難である。しかし、繫の表面しか残っていない例(図4-2、矢印)や、また合わせ目を裏側にした例に関しては、その縫いを確認できる(図5-7、矢印)。なお、折返して筒状にした繫の内部に織物を入れた事例が大韓民国(以下韓国)高霊郡池山洞四四号墳主櫛a例^①(f字形鏡板轡と鈴付剣菱形杏葉のセット)で確認できる(図2)。

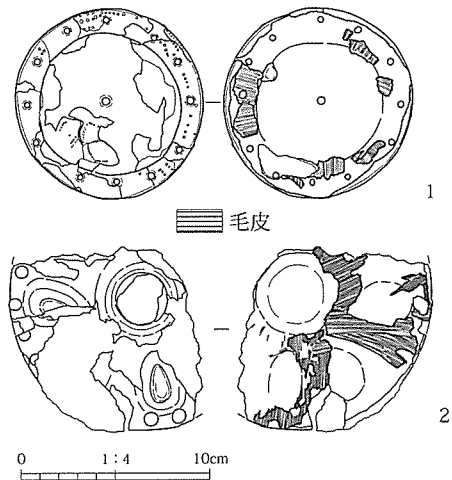
皮を用いた繫の存在が想定される(図3^③)。無脚雲珠の使用方法を考えると、鉢の中心から見て放射状に繫が配置される。実際に裏面を観察すると獣毛の単位が放射状に見られることから、繫の表面に獣毛が残されていたと考えてよい(図4-5)。これらは毛皮であることを考えると、組緒ではなく、折返繫などの幅広の繫である可能性が高いと思われる。

(b) 繫表面の装飾技法

繫は個々の馬具の連結の機能を果たすだけでなく、それ自体が装飾馬具の一部としても機能していたと考えられ、種々の装飾技法が認められる。ここでは、確認できた各種の装飾技法について概観しておく。なお、以下であげる技法はいずれも現状では折返繫にのみ認められる。

織物巻^④ 千賀の研究をはじめ^⑤、多くの個別報告^⑥により、皮革製の繫本体に織物を巻き付けたものがあることが指摘されている。この技法を織物巻とする。皮革製の繫本体は、江子田金環塚古墳例(図4-1、矢印が織物、破線は前述の折返繫)などを見る限り、折返繫である。また、織物巻は折返繫の合わせ縫いをしたのちにおこなわれていたため、外面では繫の合わせ目が見えない。織物の巻き付け方、綴じ方は不明であるが、後述するように巻き付けた織物を綴じ合わせたと思われる例も存在する。

繫の残存状況が悪いものでは、雲珠や辻金具の脚、吊金具の吊手に織物が付着している例もある。これについても、多くの場合、織物巻を施した折返繫とみてよい。

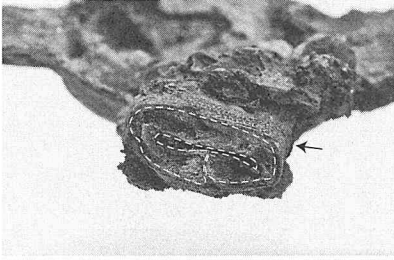


1 豊田大塚古墳 2 めんぐろ古墳
図3 毛皮繫実測図 (S=1/4)

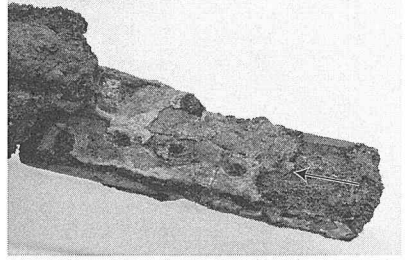
また、織物の素材、織組織についてもいくつかの報告がある。石光山八号墳例では、平織の麻布で織密度は1cmあたり経九〜一〇本、緯六〜八本で、織維はS撚りの直径〇・五〜一mmとされる。^⑦室ノ木古墳B例では、方形繫飾金具に平地の経錦が付着しているとの報告がある。^⑧栃木県中山古墳例(十字文楕円形鏡板轡と三鈴杏葉のセット)では、辻金具に残された織物は、経、緯とも1cmあたり二〇〜三〇本程度の細かい織目で、平織とは断言できないという。^⑨田中三六号墳a例の雲珠や辻金具では、1cmあたりの織密度が三〇×三〇本のものと三〇×二〇本のものがあり、いずれも平織で、糸に撚りは見られないと報告する。^⑩

実見したなかでは、江子田金環塚古墳例(図4-6)、大阪府牛石七号墳a例(f字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセット)、滋賀県山津照神社古墳a例(十字文楕円形鏡板轡と三葉文楕円形杏葉のセット、図4-7)、千葉県新坂一号墳例(鐘形鏡板轡のセット)、奈良県市尾墓山古墳a・b例などで、比較的残りのよい織物を観察できた。これらは、いずれも経糸が緯糸三本程度を飛び越えて織られている状況を確認できた。この織組織は経錦に近いものであると考えられる。^⑪また、糸はいずれも撚りが確認できず、絹を用いている可能性が高い。^⑫また、奈良県牧野古墳A(三葉文心葉形鏡板轡と三葉文心葉形杏葉のセット、図4-8)では、辻金具と多角形繫飾金具に織物を確認できるが、箄目をもつ平絹であると思われる。

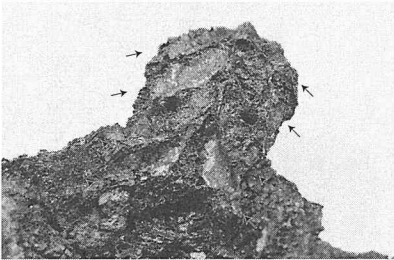
織密度については、^⑬経錦と思われる江子田金環塚古墳例で1cmあたり経三四本、緯二六本である。また、山津照神社古墳a例で経四二本、緯二四本である。また、箄目の平絹と思われる牧野古墳A例では、箄目一入りで、経三六本、緯一八本である。現段階では資料数が少ないが、今後、織密度や織り方の違いにより用いられた織物を分類できる可能性がある。^⑭縁飾^{まがり}縁飾^⑮縁飾は繫の側縁に観察される太さ3mm程度の一見して組紐状の装飾である。日本列島の古墳時代の馬具では、繫のみならず、その他に鞍の磯金具^⑯の下縁部や花卉形杏葉の縁部^⑰に確認できる。また、馬具以外では胡縁^⑱や鞞^⑲の金具の縁部にも確認できる。このことから、古墳時代後半期の金属製品と有機質素材からなる複合素材手工業製品に共通して用いられる装飾技法であったものと思われる。^⑳縁飾は馬具や胡縁^㉑において、古くから認識されてきたが、同一資料について



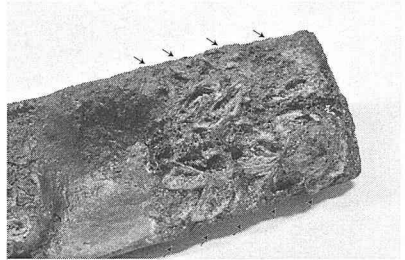
1 折返の技法 江子田金環塚古墳 矢印は織物



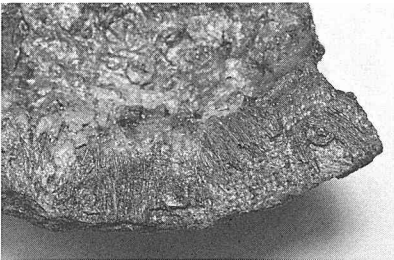
2 折返繫の表面側の合わせ目(矢印) 江子田金環塚古墳



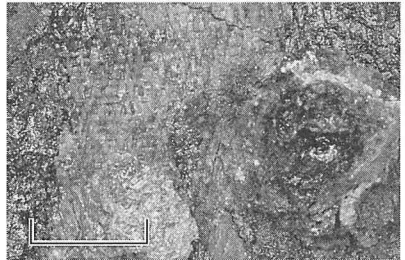
3 二畝組緒繫(矢印) 堀ノ内13号墳



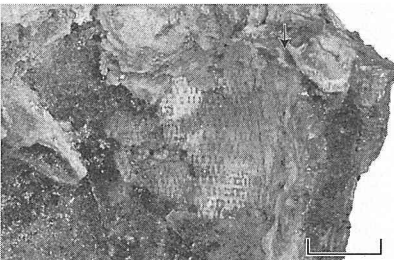
4 四畝組緒繫(矢印) 下石橋愛宕塚古墳 a



5 毛皮繫 四ツ山古墳

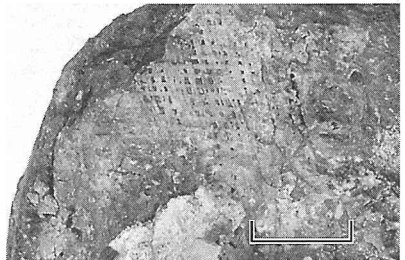


6 織物巻の織組織 江子田金環塚古墳 (上下が経方向)



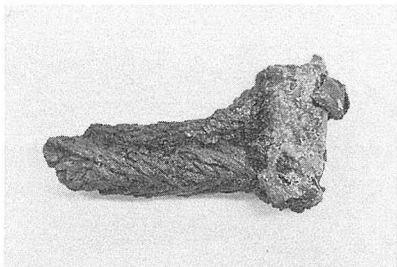
7 織物巻の織組織 山津照神社古墳 a (上下が経方向) 矢印は縁飾

6~8スケールは5mm

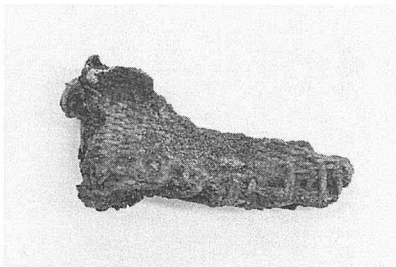


8 織物巻の織組織 牧野古墳 A (上下が経方向)

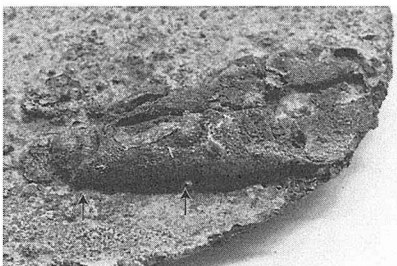
図4 繫の構造と装飾(1)



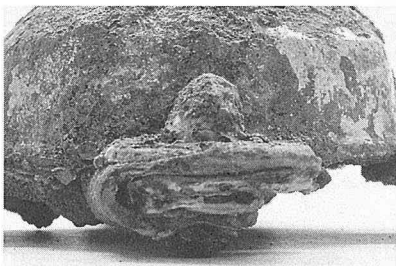
1 縁飾と織物巻 江子田金環塚古墳(2の表面)



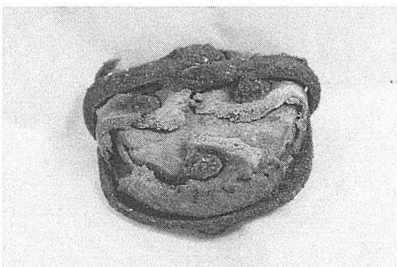
2 縁飾と織物巻 江子田金環塚古墳(1の裏面)



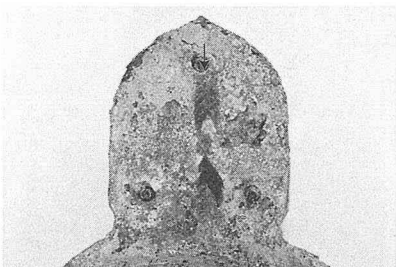
3 草紐補助縫繫 (矢印が草紐補助縫繫)
竹原古墳 b



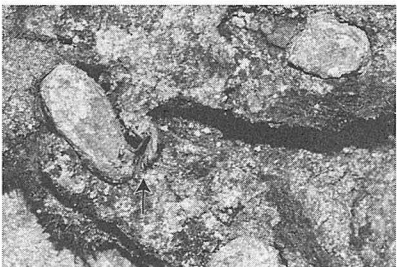
4 別材巻繫 竹原古墳 a



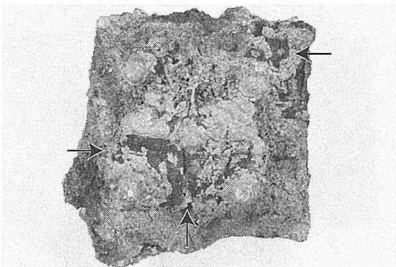
5 部分的な別材巻繫 綿貫観音山古墳A



6 装飾紐付繫 (矢印が装飾紐) 珠城山3号墳



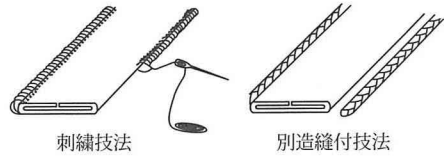
7 折返繫の縫い合わせの糸(矢印) 桃谷1号墳



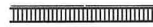
8 素繫の漆塗(矢印) 倭文1号墳

図5 繫の構造と装飾(2)

技法の分類



見かけ上の分類 (平面)



垂直型



斜行型

図6 縁飾技法の分類

飾によって綴じ合せられているようにも見える。このことから、縁飾を施すにあたって、皮革製繫本体に巻き付けた織物を側縁部でつまみだしていることによる可能性もある。

用いられた糸については、残りのよい江戸田金環塚古墳例では、二本程度を撚り合わせたか、組んだものである。縁飾を構成する糸には撚りが認められず、絹の可能性もある。

縁飾の色調は福井県十善の森古墳 a 例（鈴付内澁楯田形鏡板轡と鈴付劍菱形杏葉のセット）や山津照神社古墳 a 例（図4-7、矢印が縁飾）、新坂一号墳例などでやや赤みが目立つことから、染色された糸が用いられた可能性がある。

補助縫 折返繫の中央での縫い合わせに加えて、重なった皮革を幅広の紐で縫い綴じる技法で、表裏に縫い目が出る。この技法についてはすでに李恩碩による復元がある²⁵。李恩碩は、折返繫に不可欠の中央での縫い合わせとは別のこのよう

も観察者により縁飾技法の認識は異なっている²²。筆者は、先行研究の技法についての認識を踏まえたくて、技法から刺繍技法と別造縫付技法の二種類に大別し、見かけから垂直型と斜行型の二種類に大別することができると考えている²³（図6）。馬具の繫についてみると、見かけ上では観察できた多くの資料において斜行型である。江戸田金環塚古墳例の縁飾は織物巻と合わせて用いられている。この縁飾が織物に付着したまま皮革製繫本体から剝離した小片は、縁飾の技法を推定するうえで重要な資料である（図5-1・2）。

表面を見ると縁飾は斜行型であることが明らかである（図5-1）。本来皮革製の折返繫本体があつた内面を見ると（図5-2）、この斜めの糸がそのまま織物に入っている様子が確認でき、刺繍技法によるものであることがわかる。しかし、内面で見ると縁飾の部分では織物は谷状になり、一見二枚の織物が縁

な縫い合わせについて、繫の補強のためである可能性を指摘している。本稿でもこれに従い、この技法を補助縫と呼称する。補助縫には、皮革紐と組紐を用いる場合があるが、前者は日本列島では福岡県竹原古墳b例(十字文心葉形杏葉のセット)や持田五六号墳例(透十字文心葉形鏡板轡の祖型と忍冬楕円文心葉形杏葉の祖型のセット)、後者は藤ノ木古墳A例のみでしかこれまでのところ確認されていない。

藤ノ木古墳A例では幅のある組紐を用いていることから、補助縫の機能としては、繫の縫い合わせを強固にするほかに、装飾としての機能も考えられる。紐が皮革紐の場合についても、李恩碩は天馬塚の事例をもとに、繫本体が褐色であるのに対して、補助縫紐は黒褐色であり、染色などによって装飾性を高めた可能性を指摘している。筆者が確認した竹原古墳b例でも、褐色の繫本体に対して、黒褐色の皮革紐で補助縫が施されており、染色による可能性もあろう(図5-3、矢印)。

別材巻 折返して筒状にした皮革製の繫(素繫に該当)本体に、同程度の厚みのある別材を巻き付ける技法である。巻き付けた別材は皮革もしくはフェルト^②などの可能性がある。竹原古墳a(花形鏡板轡と花形杏葉のセット)の辻金具では、皮革製の繫本体が黄色味を帯びているのに対し、巻き付けられた別材はやや赤みを帯びている。錆による可能性もあるが、素材自体の違いとも考えられる(図5-4)。

なお、竹原古墳a例などを見る限り、雲珠や辻金具の脚に接するところ以外にもその構造を保った繫が延びていくと考えられ、全体が別材巻による装飾を施していたと考えられる。一方、綿貫観音山古墳Aの青銅製爪形金具では繫の端部が残っており、別材巻繫が確認できる(図4-5)。しかし、これと同一のセットの歩揺付飾金具などでは別材巻が確認できず皮革紐補助縫繫であり、繫の先端のみキャップ状の別材がはめられていた可能性がある。

装飾紐 馬越長火塚古墳例の報告で、雲珠や辻金具の脚で観察された幅5mm程度の幅広の紐が皮革を筒状にして縫い合わせるのに使用された可能性が指摘された^②。また山田・小村は、この部分に用いられた紐が太いものと細いものの二種類

があり、前者は折返繫の綴じ合わせと装飾の機能をもって用いられ、後者は後世の糸鞆や糸総による飾りを思わせると指摘する。後述するように皮革の縫い合わせに用いられる糸は1mm程度のごく細いものであること、縫い目が確認できないことから(図15―4)、縫い合わせに用いたと考えるには不適當で、装飾のための紐である可能性が高いと考えられる。実見した中でも、同様の事例は、奈良県珠城山三号墳例(唐草文透彫心葉形鏡板轡と鳳凰文透彫心葉形杏葉のセット、図5―6、矢印が装飾紐)、平林古墳例(十字文楕円形鏡板轡と三葉文心葉形杏葉のセット)、栃木県下石橋愛宕塚古墳b例(金銅製引手轡のセット)などで確認できた。これらの事例も馬越長火塚古墳例と同様に、紐は雲珠や辻金具の脚に接しており、その上に皮革製の繫本体が確認できることから、繫の表面の中央を飾るように付けられていたと考えられる²⁸⁾。

そのほか、本稿では主要な分類要素としてはあげないが、折返繫における縫い合わせ技法や、繫本体への漆塗の有無、皮革の動物種などの問題がある。漆塗の有無や皮革の動物種は、折返繫だけでなく組緒繫や毛皮繫とも関連する。これらについて順に説明を加えよう。

折返繫の縫い合わせ 折返繫では、皮革を折返して筒状にするため、糸を用いて縫い合わせがおこなわれる。群馬県前二子古墳例(f字形鏡板轡と劍菱形杏葉のセット)や、京都府桃谷一号墳例(環状鏡板轡のセット、図5―7、矢印が縫糸)、上塩冶築山古墳A例などで確認できる。縫いのピッチは、桃谷一号墳例では○・4cm前後、前二子古墳例では○・7cm前後、上塩冶築山古墳A例では○・8cm前後である。桃谷一号墳例では幅約1mmの糸が用いられており、植物繊維のようにもみえる。

また、鏡板や杏葉の吊金具や、雲珠や辻金具の脚などの連結部に繫を留める際に、合わせ目を表面にするか、裏面にするかが、縫い目の装飾と関係して重要である。前二子古墳例では表面、上塩冶築山古墳A例や桃谷一号墳例では裏面において確認できる。

漆の塗布 皮革製の繫に漆塗りが施されることがある。鳥取県倭文六号墳例(f字形鏡板轡と鉄製劍菱形杏葉のセット、図

5—8、矢印が漆膜)、群馬県井出二子山古墳の方形飾金具、埼玉県目沼九号墳例(三鈴杏葉のセット)などで確認できる。いずれの馬具についても、組合せ辻金具や環状雲珠に用いられた方形金具などで皮革の表面に漆塗膜が確認できる。

時期が下るが、正倉院宝物の「馬鞍」に伴う多くの繫、皮革には表面に漆が塗られていることが確認されている^{②③}。ただし、人用の皮革製のベルトにも漆塗が確認されており、馬具の繫に特徴的な技法ではない可能性もある。

皮革の動物種 古墳時代の繫に用いられた皮革の動物種がわかっているものはほばない。馬越長火塚古墳例では、電子顕微鏡による観察により、残された毛髄質の痕跡の直径から大型哺乳類のものであることが確認されている。また、藤ノ木古墳Aの步揺付飾金具に残された繫については次のように意見が分かれる。出口公長は革の成分分析から鹿革の脳繫なめしを施したものと^③、一方、石橋武彦は電子顕微鏡による観察で、小型動物であり、あえて言うならば羊皮の可能性があると^④した。時期が下るが、正倉院の「馬鞍」に付属する繫の一部については牛革であることが報告されている。動物種の特定は繫の生産過程における皮革素材の調達という観点から重要であるため、今後の自然科学分析の結果の蓄積を待ちたい。^⑤

2 繫の分類

これまでの観察により古墳時代の繫は以下のように分類できる(図7)。

繫の本体となる皮革は脱毛したものと、脱毛をせず毛を残した毛皮の二者が認められる。脱毛の工程はなめしなどの皮革の加工技術そのものに関係しており、皮革素材の加工工程を知る上で重要な要素であるが、出土資料からなめしの技術そのものをみきわめることは現段階では困難である。このため、肉眼観察による毛の有無の確認は有効な分類基準の一つであると考えられる^⑥。また、毛の有無は繫の装飾性の点でも大きな違いであるといえる^⑦。このことから、まず、脱毛繫と毛皮繫に大別二分類する。次に、脱毛繫については、脱毛した皮革製の繫本体の構造により、袋状に折返したものをを用い

る折返繫と、幅の細い皮革紐を組緒にした組緒繫に分けることができるのである。

このうち、折返繫は皮革を繫に用いる場合の基本的な技術であり、各種の裝飾技法が認められる。観察できた裝飾技法との組合せから素繫そが、織物芯繫おものしんが、縁飾付繫ゆかりづまが、織物巻繫おものまき、縁飾付織物巻繫ゆかりづまおものまき、皮革紐補助縫繫ほじぬいがい、組紐補助縫繫くみぬいづまが、別材巻繫べつざいまが、裝飾紐付繫かざりづまがの九類に分類できる。折返繫の各繫は以下のような特徴をもつ。なお「」は該当する李恩碩による分類⑤を示す。

素繫⑤ 折返繫で特に裝飾的な技法をもたないもの。〔A〕。

織物芯繫 折返繫の筒状になった空洞部に織物を芯として入れるもの。現在までのところ、朝鮮半島の池山洞44号墳主槨aのみでしか確認できず、本稿では紹介に留める。

縁飾付繫 折返繫の両側縁に縁飾を付けるもの。〔F〕。

織物巻繫 折返繫に織物を巻いたもの。

縁飾付織物巻繫 折返繫に織物を巻いたのち、両側縁に縁飾を付けるもの。

けるもの。

皮革紐補助縫繫 折返繫の中央の合わせ目の左右に並走させて二本の皮革紐で縫い合わせるもの。〔D〕。

組紐補助縫繫 折返繫の中央の合わせ目の左右に並走させて二本

組紐補助縫繫 折返繫の中央の合わせ目の左右に並走させて二本

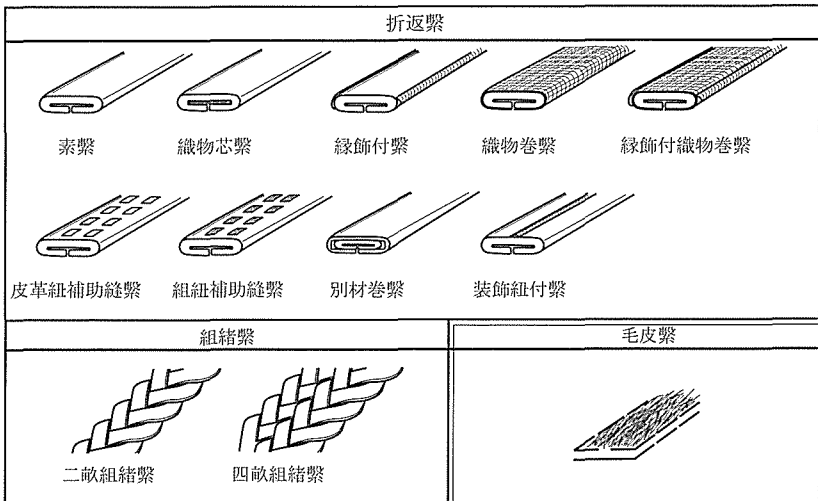


図7 繫の分類模式図

の組紐で縫い合わせるもの。〔E〕

別材巻繫 折返繫をさらに別の材で巻いたもの。

裝飾紐付繫 折返繫の装着時の表面の中央に幅広の裝飾紐一条を別に付けるもの。

組緒繫については、これまでの観察資料では組緒の残存状況が不良なものが多く、組緒の技術によって分類することは難しい。現段階では、肉眼で観察できる綾杉の畝数^{②7}によって分類をおこなっておく。

二畝組緒繫^{②8} 革紐で綾杉一筋(二畝)を面として見せるように組んだもの。

四畝組緒繫^{②9} 革紐で綾杉二筋(四畝)を面として見せるように組んだもの。

毛皮繫 脱毛しない毛皮を用いたもの。毛皮繫は佐賀県潮見古墳や香川県王墓山古墳、豊田大塚古墳(図2-1-1)、島根

県めんぐろ古墳(図2-2-2)、愛媛県四ツ山古墳(図4-1-7)などの無脚雲珠で可能性のあるものを確認できた^{③0}。しかし、繫の全体像がわからないため、ここでは事例の提示と一部の図示に留めておく。

① 朴天秀他「高霊池山洞四号墳——大伽耶王陵——」慶北大学校博物

物館叢書三七・慶北大学校考古人類学考古学叢書1(二〇〇九年)。

図2-1-1に示した辻金具には鉢部の裏面、装着時の繫の表面に組紐が付けられていたと思われるが、図2-2-2に示した繫そのものや、鏡板や杵葉の吊金具には組紐が確認できないので、ガラス玉を固定するための紐の可能性もある。このため、現段階では後述する裝飾紐と織物芯の技法を合わせもつ裝飾紐付織物芯繫は想定しない。

日本列島でも寿命王塚古墳例や香川県川上古墳例で織物を芯にした繫の可能性が指摘されたが、実見したところ織物は確認できなかった。

梅原末治・小林行雄「発見の遺物」(前掲)四八頁。花谷浩「馬具」

(「川上・丸井古墳発掘調査報告書」,一九九一年)四〇頁。

② 組紐などの研究では衫綾と呼称されるが、本稿では考古学でなじみ

のある綾杉を用いる。

③ 初村武寛「豊田大塚古墳出土雲珠と胡録金具に伴う有機質の調査」(前掲)。

④ 筆者は以前の資料紹介でこれと同様の技法を「布巻」と称したが、絹織物等を含む場合この用語は適切ではない。以後、「織物巻」に統一する。諫早直人・片山健太郎「ゴーランド・コレクションと絵師遠藤茂平」鹿谷一八号墳出土花文付雲珠・辻金具の紹介」(「古代学研究」二〇四号、二〇一四年)。

⑤ 千賀久「馬具に使用された革帯——藤ノ木古墳金銅製馬具の特殊性——」(前掲)。

⑥ 代表的なものとしては先にあげた石光山八号墳、江子田金環塚古墳などがある。

- ⑦ 角山幸洋「石光山八号墳の馬具付着織物片の観察所見」(前掲)。
- ⑧ 村井嘉雄・亀井正道「東京国立博物館図版目録古墳遺物篇関東Ⅰ」(前掲) 一八三頁。
- ⑨ 栃木県古墳勉強会(該当項目は内山敏行)「中山(将門霊神)古墳調査報告二」(「栃木県考古学会誌」第二六集、二〇〇五年) 八〇—八二頁。
- ⑩ 山岡奈美恵「田中三六号墳出土馬具付着の織維製品について」(前掲) 五六—五八頁。
- ⑪ 経錦が平織物と混同しやすい点については角山幸洋による指摘がある。角山幸洋「経錦再考」(「檀原考古学研究所論集」第一六、二〇一三年)。
- ⑫ 一般的に燃りのない糸は絹の可能性が高く、燃りのあるものについては植物繊維(特に麻)の可能性が高いとされる。沢田むつ代「出土繊維の観察法」(「季刊考古学」第九一号、二〇〇五年) 五四頁。
- ⑬ 織密度については残存状況により1cm四方を計測できないものは、〇・5cm四方を計測し、二倍した数値を示した。
- ⑭ 箴目の平絹についての認識は以下の文献を参考にした。布目順郎「目で見える繊維の考古学繊維遺物資料集成」(一九九二年)、角山幸洋「繊維—織物・組紐—」(「斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告」、一九九二年)。
- ⑮ 緑師の名称についてはすでに別稿でふれているが、下記のような理由に基づく。これまで胡縵金具などでは一般的に「緑かがり」と呼ばれている。これはその技法が織物に対して施された「かがり」とみることに由来する。しかし、同じ装飾についても複数の技法が想定されてきたという研究史、また、実際に同一資料についても異なった技法が想定されている例(藤ノ木古墳、富山県朝日長山古墳)があることから(本章註⑳参照)、名称に技法を用いず、糸を用いて緑を飾る装飾を総じて緑師と称する。
- ⑯ 上塩冶築山古墳などの事例がある。松尾充晶「馬具」(「上塩冶築山古墳の研究」、前掲) 九二—九三頁。
- ⑰ 奈良県上五号墳などの事例がある。吉松茂信「上五号墳出土繊維について」(「上五号墳」奈良県文化財調査報告書第九二集、二〇〇三年) 七七—八〇頁。
- ⑱ 富山県朝日長山古墳などの事例がある。小村真理・井上美知子「朝日長山古墳出土胡縵金具について」(「氷見市史資料編五考古占、二〇〇二年)。
- ⑲ 上塩冶築山古墳などの事例がある。大谷晃二「武器・武具」(「上塩冶築山古墳の研究」島根県古代文化センター調査研究報告四、一九九九年) 七六頁。
- ⑳ 緑師技法の系譜については別稿を準備している。朝鮮半島でも、高敞鳳德里一号墳四号石室出土の胡縵金具(諫早直人氏ご教示)や、公州宋山里一号墳石室出土の胡縵金具(野守健・神田惣藏「公州宋山里古墳調査報告」古蹟調査報告昭和二年度第二冊、一九三五年) 一一頁・一四頁、梁山夫婦塚古墳出土の胡縵金具(馬場一郎・小川敬吉「梁山夫婦塚と其遺物」本文、古蹟調査特別報告第五冊、一九二七年) 二〇図、帯金具(馬場一郎・小川敬吉「梁山夫婦塚と其遺物」図版、古蹟調査特別報告、一九二七年) 第一八、公州武寧王陵出土の飾履の内敷(조효숙・김동진・이은진・전현실「적멸의종류와제척특성」『武寧王陵출토유물분류보고서』(一)二〇〇五年) 一〇九頁、などでも確認されている。また、より古い段階では、モンゴル、ノイン・ウラ墳墓群出土の沓内敷、鞍橋表面飾などにも同様の装飾がみられ、古くからモンゴル高原周辺から極東地域にかけての騎馬文化の中で様々な器物に用いられた装飾技法である可能性がある。梅原末治「蒙古ノイン・ウラ発見の遺物」(「東洋文庫論叢第二七冊、一九六〇

- 年)。
- ⑲ 報告書ではじめて図化したのは、馬具では寿命王塚古墳の報告書である。梅原末治・小林行雄「発見の遺物」(前掲)四九頁。ただし、それ以前に、京都府鹿谷一八号墳出土馬具の精巧な絵図を描いた遠藤茂平による認識がある。宮川慎一「描かれた古墳出土品——明治一四年の発掘調査」(『学叢』二七、二〇〇五年)、諫早直人・片山健太郎「ゴーランド・コレクションと絵師遠藤茂平」鹿谷一八号墳出土花文付雲珠・辻金具の紹介」(前掲)。また、馬具以外では梁山夫婦塚古墳出土の胡縵金具、帯金具が最初だと思われる。馬場是一郎・小川敬吉「梁山夫婦塚と其遺物」(本文、図版、前掲)。
- ⑳ 例えば朝日長山古墳の資料についての沢田むつ代「出土繊維の観察法」(前掲)。澤田むつ代「胡縵金具に付着する繊維について」(『日本出土 原始古代繊維製品』の分析調査による発展的研究、二〇〇六年)と小村眞理・井上美知子「朝日長山古墳出土胡縵金具について」(前掲)による違いがある。
- ㉑ 筆者の分類のうち、刺繍技法は小村眞理・井上美知子「朝日長山古墳出土胡縵金具について」(前掲)にて復元された技法とほぼ同じである。この技法については、小村眞理氏に実演のうえ、ご教示を賜った。胡縵の縁飾については、刺繍技法が多いという認識についても小村氏にご教示をいただいた。また、現状では筆者の分類した技法と見かけに対応関係があるかどうかは確認できていない。胡縵等を含めて今度の課題としたい。
- ㉒ 報告書では同様の見解を示す。永沼律朗「馬具」(前掲)二二—二七頁。
- ㉓ 李恩碩「繫에 관한 小考」(『文化財』第三五号、二〇〇二年)八四頁。
- ㉔ 古墳時代のフェルト様の繊維製品の可能性が指摘された例として大谷古墳の金銅製雲珠がある。樋口隆康・西谷真治・小野山節「馬具」『大谷古墳』(一九五九年)一一〇頁。また、千葉県浅間山古墳でも冠帽に伴ってフェルトとして取り上げられた資料がある。後者については永嶋正春の分析によりフェルトではないことが確認されている。永嶋正春「浅間山古墳出土のフェルト様素材について」(『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』、二〇〇二年)。
- ㉕ 岩原剛・堀哲郎・宮原祐治「金銅製馬具」(豊橋市文化財調査報告書第一二〇集、二〇一二年)、山田卓司・小村眞理「金銅製馬具を科学する」(前掲)。
- ㉖ これに該当する技法は梁山夫婦塚出土の帯金具の帯(馬場是一郎・小川敬吉「梁山夫婦塚と其遺物」図版、前掲)や、池山洞四号墳出土位置不明の胡縵金具(朴天秀他「高霊池山洞四号墳——大伽耶王陵——」、前掲)に確認することができる。
- ㉗ 出口公長他「正倉院宝物特別調査報告皮革製宝物材質調査」(『正倉院紀要』第二八号、二〇〇六年)。
- ㉘ 出口公長他「正倉院宝物特別調査報告皮革製宝物材質調査」(前掲)二五—二八頁の鈔帶。
- ㉙ 出口公長「皮革あらかると」(一九九九年)一九—二二頁。
- ㉚ 出口公長「皮革あらかると」(前掲)一九—二二頁。樞原考古学研究所から調査依頼を受けたのは石橋武彦であるとされるが、石橋の鑑定結果が公表されているかは確認できていない。
- ㉛ 馬具に用いられた皮革の加工技術について検討した例として、桃谷一号墳の繫に関する飯塚義富の分析がある。「十字形辻金具に附着していた皮革の電子顕微鏡による観察」(『峰山桃谷古墳』『京都府文化財調査報告』第二二冊、一九六一年)七九—八一頁。
- ㉜ 馬具に關係する毛皮装飾として、後世の例であるが正倉院の熊毛の障泥がある。

⑤ 李恩碩「고대 동북아시아계(繫)에 관한 연구」(前掲)。

⑥ 素繫の読みは、屋代弘賢「卷第一六九器財部馬具歌」(「古今要覽稿」、一八二一—一八四二年)にある「蹏歌」(車を用いた総のないもの)の「そ」と同様である。本論では付加的な裝飾要素をもたないものを指す。

⑦ 二畝(ふたつうね)、四畝(よつうね)と読むべきとの指摘を上野祥史氏よりいただいた。

⑧ いずれも無脚雲珠である点には注意をしておく必要がある。例示したのはいずれも複数セットの馬具出土古墳であるが、無脚雲珠がどのセットに含まれるか確定できないため、セット名は示していない。

第三章 セットからみた繫

前章で分類した各繫の実例を、繫が連結された金属製馬具のセットにおいて検討してみる。繫の変遷の検討に備えて、各セットの編年の位置づけも示した。ここでは、おもに内山敏行による鏡板・杏葉の編年案を用いることとした。また、環状鏡板繫については岡安光彦の段階区分を内山編年の段階区分と対応させる。内山編年では、古墳時代の馬具の存在する時期を中期、後期、終末期の三時期に分け、中期を七段階、後・終末期を各四段階に区分する。なお、本稿では多様な裝飾馬具が認められる中期五段階から終末期一段階までを分析の対象とする。環状鏡板繫については岡安により出現時期から終焉時期までが六段階に編年されている。Ⅰ段階が後期一段階、Ⅱ段階が後期二段階、Ⅲ段階が後期三段階、Ⅳ段階が後期四段階、Ⅴ段階が終末期一段階におおよそ対応する。

編年の概要は以下のとおりである。中期五段階にf字形鏡板繫と剣菱形杏葉、鈴杏葉と鈴付楕円形鏡板繫、鉄製内湾楕円形鏡板繫などの馬具が出現する。やや遅れて後期一段階に十字文楕円形鏡板繫や三葉文楕円形杏葉などがみられるようになる。後期二段階に鐘形鏡板繫と杏葉、棘葉形杏葉などがみられるようになる。後期三段階に唐草文・鳳凰文透彫心葉形鏡板繫や杏葉、車文・格子文楕円形鏡板繫と杏葉、花形鏡板繫と杏葉があらたにみられるようになる。また、前段階にその祖型が舶載されていた透十字文心葉形鏡板繫や三葉文心葉形鏡板繫や杏葉も一定程度みられるようになる。一方で早い段階にみられたf字形鏡板繫と剣菱形杏葉や十字文楕円形鏡板繫と杏葉はほとんどみられなくなる。

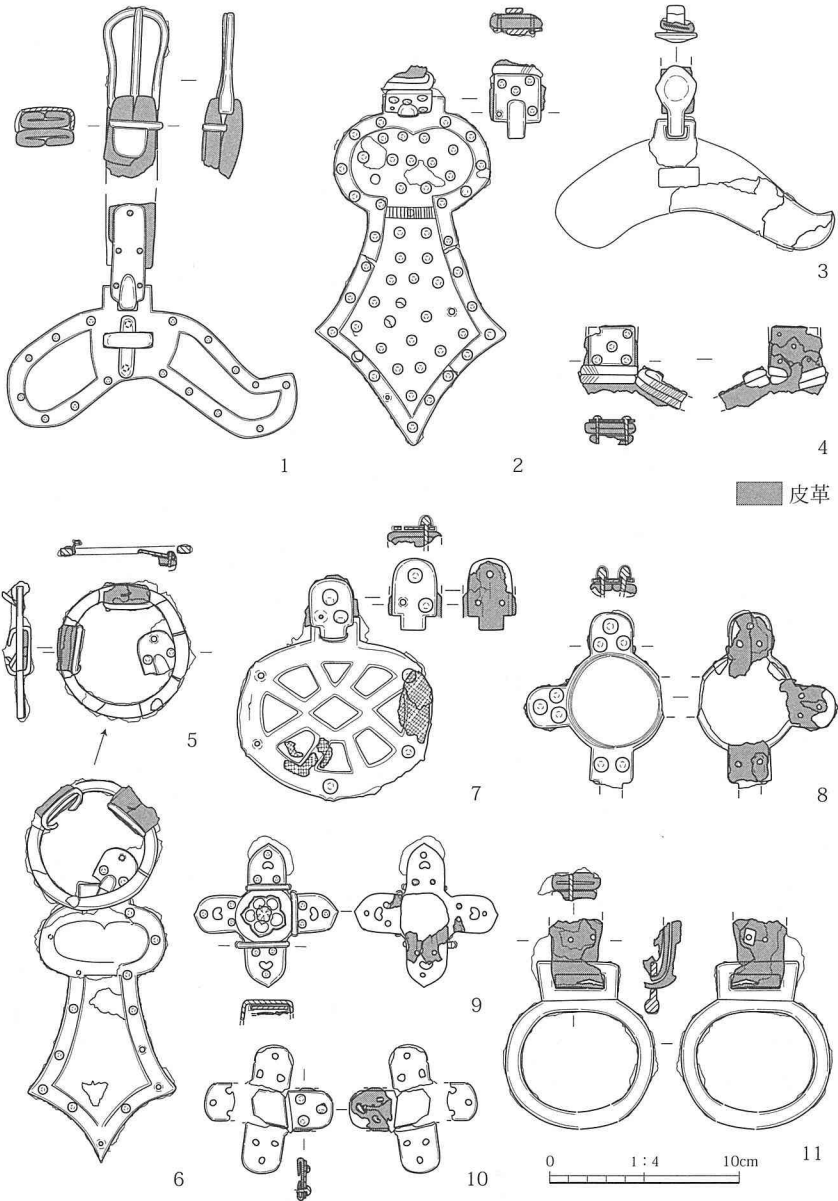
一方、環状鏡板轡についてはⅠ段階に兵庫鎖を吊金具として用いた素環系、小型矩形立間系と複環系が成立し、Ⅱ段階に複環系がみられなくなり、大型矩形立間系が成立する。Ⅲ段階に吊金具としての兵庫鎖の連数が単連になり、瓢形の鏡板が登場する。Ⅳ段階に鉸具造立間の鏡板が登場する。Ⅴ段階に鏡板の小型化が進む。

1 折 返 繫

(a) 素繫

素繫は静岡県多田大塚四号墳例(f字形鏡板轡のセット、図8-1)、京都府上狛天竺堂一号墳例(鉄製劍菱形杏葉のセット、図8-2)、京都府沢三号墳例(鉄製f字形鏡板轡のセット、図8-3)、山形県大之越古墳例(鉄製劍菱形杏葉のセット)、川上古墳例(鉄製f字形鏡板轡のセット)、倭文六号墳例(図5-8)、埼玉県どうまん塚古墳例(鉄製内湾楕円形鏡板轡と劍菱形杏葉のセット、図8-5・6)などのf字形鏡板轡や劍菱形杏葉のセットや、目沼九号墳例(図8-4)などの三鈴杏葉のセットに認められる。多田大塚四号墳例、沢三号墳例、大之越古墳例、川上古墳例が中期五段階である。上狛天竺堂一号墳例、倭文六号墳例、どうまん塚古墳例が中期六段階である。目沼一号墳例は後期一段階である。また、より新しい段階では、風返稲荷山古墳B例のように、車文楕円形鏡板轡や格子文楕円形杏葉のセット(図8-7・8)や、佐賀県鏡山二号墳例の鳳凰文透彫心葉形杏葉のセット(図8-9)にも認められる。さらに益子天王塚古墳①例(図8-11)、桃谷一号墳例(図8-10)などの岡安編年Ⅴ段階の環状鏡板轡を中心とするセットにも認められる。風返稲荷山古墳B例、鏡山二号墳例、益子天王塚古墳①例が後期四段階、桃谷一号墳例が終末期一段階である。

以上より、中期五段階から後期一段階のいずれの事例も、鉄地金銅張か鉄製の違いはあれど、f字形鏡板轡や劍菱形杏葉、これらと密接な関係のある鈴杏葉のセットに認められる。一方、後期一段階以降の資料については、車文楕円形鏡板轡と格子文楕円形杏葉のセットや、鳳凰文透彫心葉形杏葉のセットに用いられている。一方で、鉄製環状鏡板轡を中心と



1 多田大塚4号墳 2 上天竺堂一号墳 3 沢3号墳 4 目沼9号墳 5・6 どうまん塚古墳
7・8 風返稲荷山古墳B 9 鏡山2号墳 10 桃谷1号墳 11 益子天皇塚古墳①

図8 素繫実測図 (S=1/4)

するセットに用いられていることもわかる。現状では時期によつて確認事例に多寡が認められるが、中期五段階から終末期一段階までの長期にわたつて採用されているとみてよいであろう。また、金銅装の馬具から鈴杏葉などの鑄銅製馬具、環状鏡板轡などの鉄製馬具のセットに至るまでの複数の系列の馬具のセットに認められるという点からも、素繫の普遍性を確認することができる。

(b) 縁飾付繫

縁飾付繫は十善の森古墳 a 例や大谷古墳 a 例 (図 9-1)、上塩冶築山古墳 A 例 (図 9-3) の三例のみ確認できる。十善の森古墳 a 例は鉄地金銅張鈴付劍菱形杏葉のセット、大谷古墳 a 例は鑄銅製鈴付 f 字形鏡板轡と鑄銅製鈴付劍菱形杏葉のセットであり、両セットを構成する鏡板轡と杏葉はいずれも鈴付馬具の中では特殊な事例である。大谷古墳 a 例では鏡板の吊金具や杏葉の吊金具にのみ縁飾付繫を確認することができるが、これらとセットを構成する透彫雲珠や環状辻金具に残る繫は縁飾のない素繫であり (図 9-2)、吊金具に留められた繫の部分だけ、縁飾が付いていた可能性がある。また、上塩冶築山古墳 A 例では轡は透十字文心葉形鏡板轡である一方、透心葉形杏葉は類例の確認できない資料である。十善の森古墳 a 例と大谷古墳 a 例が中期七段階、上塩冶築山古墳 A 例が後期三段階である。

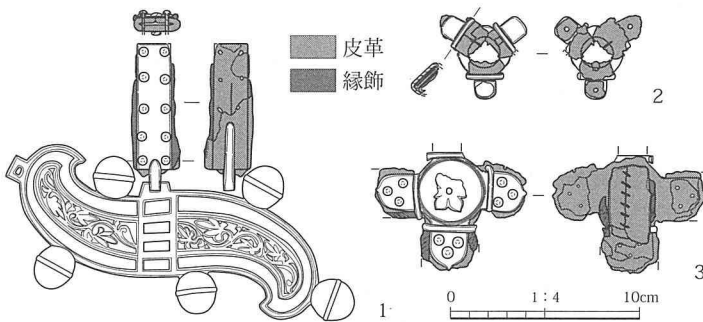
(c) 織物巻繫

織物巻繫は福岡県番塚古墳例 (f 字形鏡板轡と劍菱形杏葉のセット、図 10-1)、江子田金環塚古墳例 (f 字形鏡板轡と鐘形杏葉のセット、図 10-4)、牧野古墳 A 例 (三葉文心葉形鏡板と杏葉のセット、図 10-2・3) で確認できる。番塚古墳例では鉸具や環状雲珠もしくは組合せ辻金具を構成したと思われる方形金具において確認できる。方形金具に確認される繫については、報告書でも折返繫二条を一組にしていることが指摘されている。^⑤資料を観察すると、図 10-1 に示したように、この二条を覆うように織物が巻かれていることがわかる。番塚古墳例以外には二条の折返繫を束ねた事例は確認できていない。江子田金環塚古墳例において織物巻繫がみられるのは、二個出土している鉢状辻金具のうちの一つで、図示したように

(図10-4) 杏葉を垂下する縦方向の繫に直交する横方向の繫として用いられている。江子田金環塚古墳ではその他の馬具で確認できる繫がすべて縁飾付織物巻繫であり(図11-3)、何らかの理由で、この部分だけ織物巻繫が用いられたと考えられる。この部分の織物は経錦と思われ、観察できる裏面では織物の合わせ目は確認できないことから、表面側で確認できる可能性がある。牧野古墳Aでは織物巻繫は鉢状雲珠、辻金具(図10-3)、多角形繫飾金具(図10-2)に確認できる。辻金具では、図示した裏面の下の脚で比較的良好に織物巻繫が残存する。写真に見るように、この辻金具の織物(図4-8)は、織物を縦に用いた、箎目一入の平絹であると考えられる。江子田金環塚古墳例は経錦、牧野古墳A例は箎目の平絹であることから、織物を巻くという技法は装飾性を重視したものであったことがうかがえる。番塚古墳例、江子田金環塚古墳例が後期一段階、牧野古墳A例が後期四段階である。

(d) 縁飾付織物巻繫

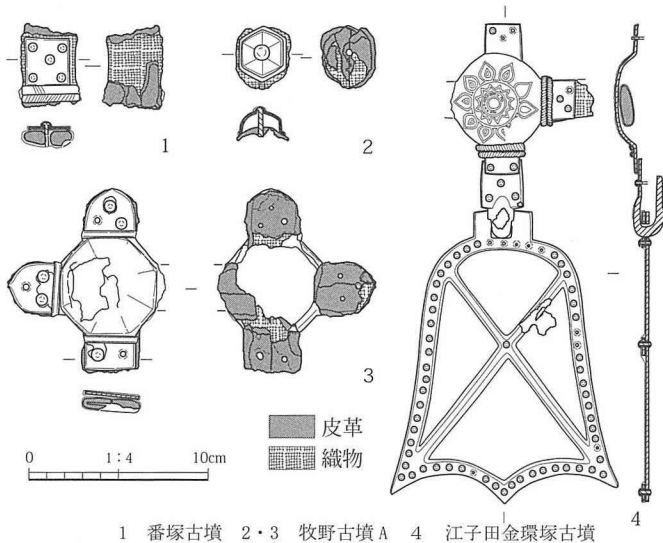
縁飾付織物巻繫は比較的多くの事例を確認できる。三重県井田川茶白山古墳では、f字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセットaと、十字文楕円形鏡板轡と忍冬楕円文楕円形杏葉のセットbの双方において縁飾付織物巻繫を確認できる。そのほか、同様にf字形鏡板轡や剣菱形杏葉のセットとしては、王墓山古墳^{おうはかやま}b例(f字形鏡板轡のセット、図11-1)、愛媛県猿ヶ谷二号墳a例(f字形鏡板轡のセット、図11-2)、香川県菊塚古墳a例(f字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセット)、牛



1・2 大谷古墳A 3 上塩冶築山古墳A

図9 縁飾付繫実測図 (S = 1/4)

石七号墳 a 例 (図11-8)、鹿谷一八号墳 A 例 (f 字形鏡板轡と劍菱形杏葉のセット、図11-11) などがあげられる。f 字形鏡板轡と三鈴杏葉のセットの崇信寺一〇号墳例もこの繫が連結されている。f 字形鏡板や劍菱形杏葉に劍突起が付いたものでは、大阪府河内愛宕塚古墳 a 例や寿命王塚古墳 b 例で確認できる。十字文楯円形鏡板轡や三葉文楯円形鏡板轡と三葉文楯円形杏葉のセット、図11-7)、同寛弘寺七五号墳例 (内湾楯円形鏡板轡と三葉文楯円形杏葉のセット、図11-6)、福岡県箕田丸山古墳例 (唐草文楯円形杏葉のセット、図11-4) などがある。また、鐘形鏡板轡や杏葉の事例としては、大阪府南塚古墳 a 例、藤ノ木古墳 B 例、新坂一号墳例 (図11-9)、福岡県高崎二号墳例 (図11-10) などがある。江子田金環塚古墳例と高崎二号墳例は、面繫が f 字形鏡板轡、尻繫が鐘形杏葉のセットである。井田川茶臼山古墳 a・b 例、王墓山古墳 b 例、猿ヶ谷古墳 a 例、菊塚古墳 a 例、南塚古墳 B 例、江子田金環塚古墳例が後期一段階である。牛石七号墳 a 例、崇信寺一〇号墳例、河内愛宕塚古墳 a 例、寿命王塚古墳 b 例、山津照神社古墳 a 例、梶原 D 一号墳 a 例、寛弘寺七五号墳例、箕田丸山古墳例、藤ノ木古墳 B 例が後期二段階である。新坂一号墳例、高崎二号墳例は後期三段階である。

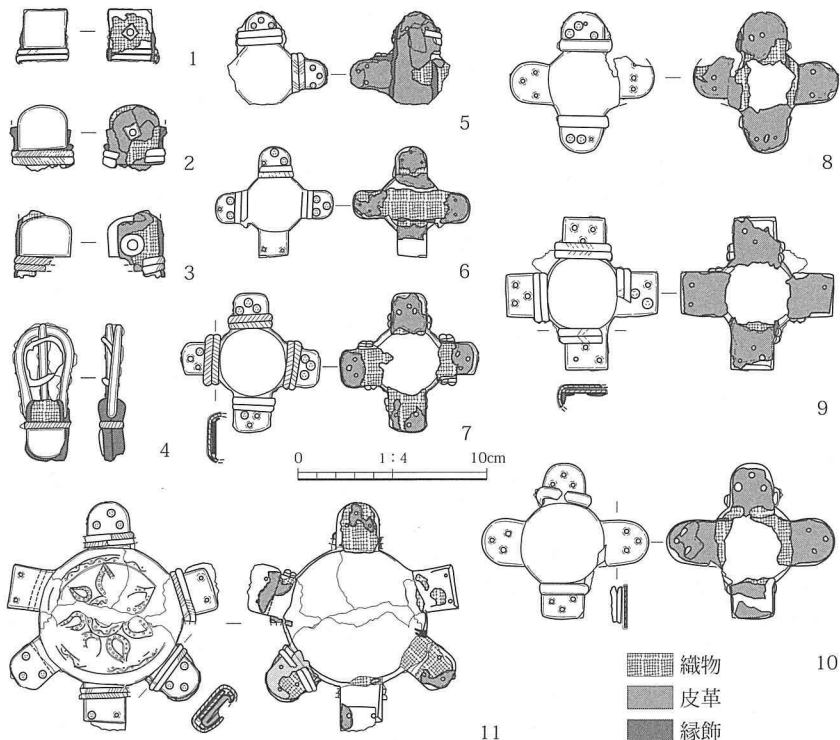


1 番塚古墳 2・3 牧野古墳 A 4 江子田金環塚古墳

図10 織物巻繫実測図 (S=1/4)

以上より、縁飾付織物巻繫は中期七段階から後期三段階までの金銅装のf字形鏡板轡や劍菱形杏葉、十字文楕円形鏡板轡や三葉文楕円形杏葉、鐘形鏡板轡や杏葉などのセツトに確認できる。中には、崇信寺一〇号墳のように鈴杏葉を含むセツトにも確認できる。この時期には、金銅装の馬具のセツト以外にも、兵庫鎮立聞環状鏡板轡などの鉄製馬具のセツトも一定数存在するが、これらには今のところ縁飾付織物巻繫が確認できない^⑦。ことから、縁飾付織物巻繫は中期七段階から後期三段階の金銅装馬具と密接な関係のもとに採用されているとみてよい。

なお、ここであげた事例以外にも織物巻のみが確認できる事例と



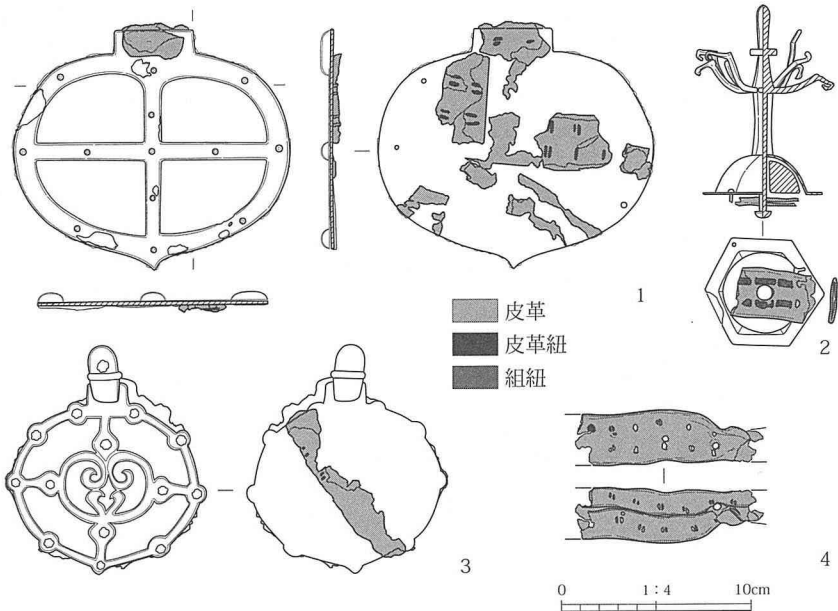
1 王墓山古墳b 2 猿ヶ谷2号墳a 3 江子田金環塚古墳 4 箕田丸山古墳 5 山津照神社古墳a 6 寛弘寺75号墳 7 梶原D1号墳a 8 牛石7号墳a 9 新坂1号墳 10 高崎2号墳a 11 鹿谷18号墳A

図11 縁飾付織物巻繫実測図 (S=1/4)

して中山古墳例、京都府物集女車塚古墳 a 例 (f 字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセット)、奈良県三里古墳 a 例 (鐘形鏡板轡と杏葉のセット)、兵庫県三町田古墳例 (鐘形鏡板轡と杏葉のセット)、愛媛県小竹六号墳例 (鐘形鏡板轡のセット) などがある。中山古墳例が後期一段階、物集女車塚古墳 a 例が後期二段階、三里古墳 a 例、三町田古墳例、小竹六号墳例は後期三段階である。縁飾は施される場所や技法からみても繫全体の残存状況が良好でなければ確認できない。しかし、これらはいずれも、後期一段階から後期三段階にかけての十字文楕円形鏡板轡や鈴杏葉、鐘形鏡板轡や杏葉のセットであることから、これらの多くも縁飾の付いた織物巻繫であった可能性が高いと思われる。

(e) 皮革紐補助縫繫

皮革紐補助縫繫は宮崎県持田五六号墳例 (図12-3)、綿貫観音山古墳 A 例、竹原古墳 b 例 (図12-1) で確認できる。持田五六号墳例は、透十字文心葉形鏡板轡の祖型と三葉文心葉形杏葉の祖型のセットに確認できる。綿貫観音山古墳 A 例は十字文心葉形鏡板轡と透彫



1 竹原古墳 b 2・4 藤ノ木古墳 A 3 持田 56 号墳

図12 革紐補助縫繫・組紐補助縫繫実測図 (S=1/4)

心葉形杏葉のセットに確認できる。また、竹原古墳b例は、十字文心葉形杏葉において確認できる。持田五六号墳例は後期二段階、綿貫観音山古墳A例と竹原古墳b例は後期三段階である。

(f) 組紐補助縫繫

藤ノ木古墳A例^⑨(唐草文透彫心葉形鏡板轡と棘葉形杏葉のセット、図12-2・4)でのみ確認できる。後期三段階に位置づけられる。

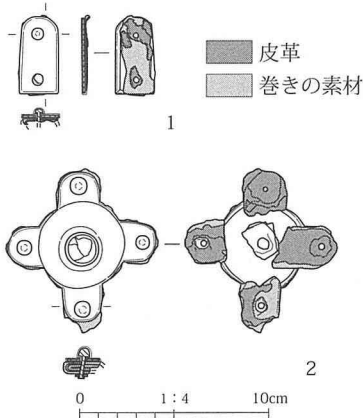
(g) 別材巻繫

石原稻荷山古墳例(図13-1)と竹原古墳a例(図13-2)の二例しか確認できないが、いずれも花形鏡板轡と花形杏葉の系列のセットである。石原稻荷山古墳例、竹原古墳a例とも後期三段階である。

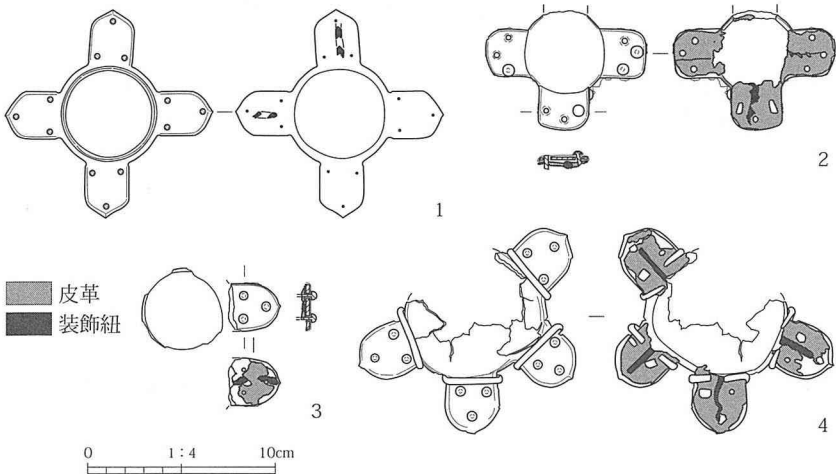
(i) 装飾紐付繫

装飾紐付繫は珠

城山三号墳例(図14-1)、下石橋愛宕塚古墳b例(図14-3)、馬越長火塚古墳例^⑩(図14-4)、平林古墳例(図14-2)



1 石原稻荷山古墳 2 竹原古墳 a
図13 別材巻繫実測図 (S=1/4)



1 珠城山3号墳 2 平林古墳 3 下石橋愛宕塚古墳 b 4 馬越長火塚古墳

図14 装飾紐付繫実測図 (S=1/4)

で確認できる。珠城山三号墳例は唐草文透彫心葉形鏡板轡と鳳凰文透彫心葉形杏葉のセットである。下石橋愛宕塚古墳b例はセットを構成する鏡板轡や杏葉の種類は不明である。馬越長火塚古墳例は轡が不明であるが、棘葉形杏葉のセットである。平林古墳例は十字文楕円形鏡板轡と三葉文心葉形杏葉のセットである。珠城山三号墳例と平林古墳例が後期三段階、下石橋愛宕塚古墳b例と馬越長火塚古墳例が後期四段階である。

2 組 繫

(a) 二畝組繫

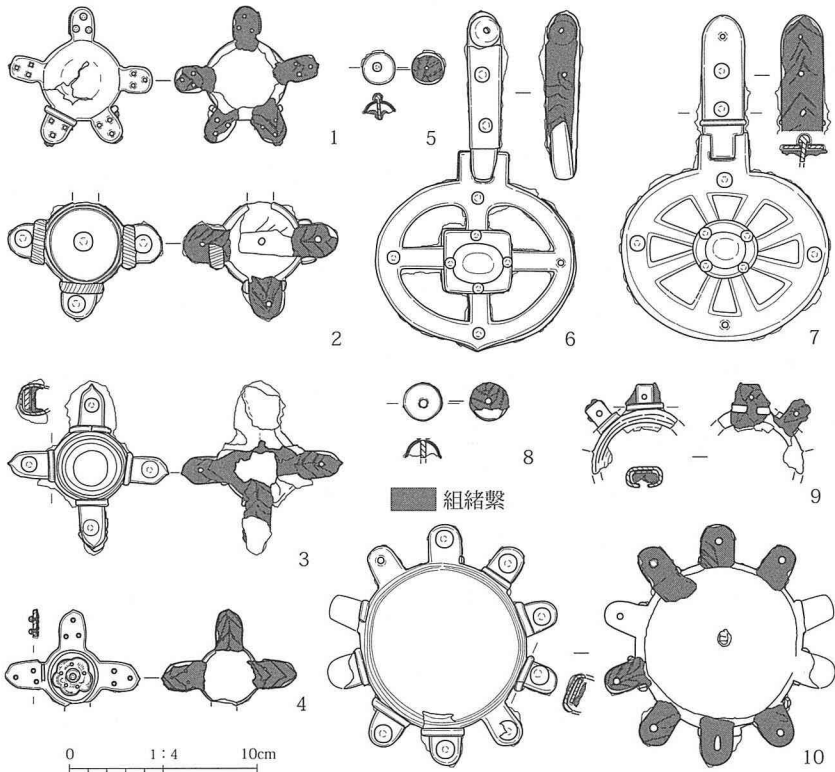
二畝組繫が確認できる事例には、大谷古墳b例(図15-1)、鴨稻荷山古墳例(図15-2)、千葉県法皇塚古墳a例(図15-5・6)、埼玉県冑塚古墳(図15-8)の半球形繫飾金具、上塩冶築山古墳B例(図15-3)、福岡県新延大塚古墳a例(図15-7)、佐賀県一本松一号墳例(図15-4)、栃木県飯塚三一号墳例(図15-9)、島根県御崎山古墳例(図15-10)がある。図示した以外では、静岡県宇洞ヶ谷横穴墓a例、梶原D一号墳b例、静岡県堀ノ内一三号墳例、益子天王塚古墳②例などがある。鏡板や杏葉がわかるものとしては、鴨稻荷山古墳例が十字文楕円形鏡板轡と三葉文楕円形杏葉のセット、上塩冶築山古墳B例は透心葉形杏葉のセット、一本松一号墳例、堀ノ内一三号墳例が唐草文透彫心葉形鏡板轡と鳳凰文透彫心葉形杏葉のセット、法皇塚古墳a例が透十字文心葉形鏡板轡のセット、新延大塚古墳a例が車文楕円形鏡板轡と格子文楕円形杏葉のセット、宇洞ヶ谷横穴墓a例が類例のない心葉形鏡板轡と同杏葉のセット、飯塚三一号墳例と御崎山古墳例が環状鏡板轡のセットである。大谷古墳b例が中期七段階である。鴨稻荷山古墳例が後期一段階、飯塚三一号墳例が後期二段階、法皇塚古墳a例、上塩冶築山古墳B例、御崎山古墳例、宇洞ヶ谷横穴墓a例、梶原D一号墳b例が後期三段階、冑塚古墳例、新延大塚古墳a例、一本松一号墳例、堀ノ内一三号墳例、益子天王塚古墳②例が後期四段階である。

以上より、二畝組繫は中期七段階から後期四段階という長期にわたり存在するものと思われる。飯塚三一号墳例や御

崎山古墳例を除いて、いずれも金銅装、銀装の鏡板轡や杏葉のセットに用いられている。一方の鉄製の環状鏡板轡を中心とするセットにおいても、飯塚三一号墳例のように、鉄製の貝装雲珠を含むセットや、御崎山古墳例のように、金銅装の雲珠や辻金具を含むセットに採用されていることからわかるように、鉄製馬具のみのセットではないことに注意しておく必要がある。

(b) 四畝組緒繫

現状では金鈴塚古墳B例(図16-1・2)と下石橋愛宕塚古墳a例(図16-3・4)の二例しか確認できないが、いずれも花形鏡板轡と杏葉のセットである。また、いずれも後期四段階である。



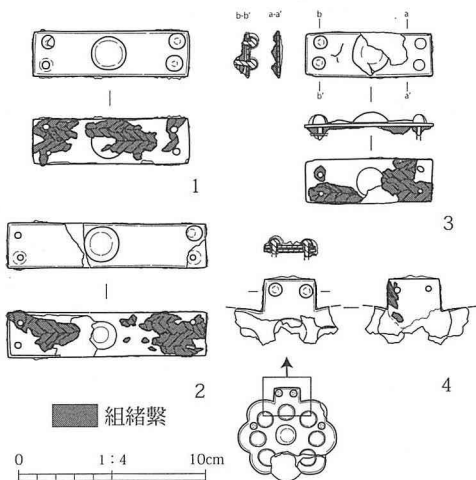
1 大谷古墳 b 2 鴨稻荷山古墳 3 上塩冶築山古墳 B 4 一本松一号墳 5・6 法皇塚古墳 a
7 新延大塚古墳 a 8 冑塚古墳 9 飯塚31号墳 10 御崎山古墳

図15 二畝組緒繫実測図 (S=1/4)

3 繫とセットとなる鏡板轡・杏葉の傾向

ここでは、鏡板轡と杏葉の特定の系列と連結された繫との相関の有無を検討する。鏡板轡と杏葉の系列と連結された繫との相関をまとめたのが表一である。表一から、f 字形鏡板轡と剣菱形杏葉、十字文楕円形鏡板轡と三葉文楕円形杏葉、鐘形鏡板轡と杏葉などの三つの系列群から構成されるセットと、その他の鏡板轡や杏葉の系列群から構成されるセットとの間には連結された繫の違いが認められる。すなわち、前述の三系列群から構成されるセットにおいては、縁飾付織物巻繫との強い相関を示しているのに対し、その他の系列群から構成されるセットにおいては、これまでもと、縁飾付織物巻繫を連結に用いた例は確認できない。また、透十字文心葉形鏡板轡や花形鏡板轡と杏葉、唐草文・鳳凰文透彫心葉形鏡板轡と杏葉の系列から構成されるセットなどでは、多種類の繫が連結に用いられていることがわかる。この違いについてまず想定されるのは縁飾付織物巻繫を多く採用する三系列群と、不採用のその他の系列群の生産時期の違いである。前者は後期三段階までに生産・流通が盛行する系列群であり、後者の透十字文心葉形鏡板轡、三葉文心葉形鏡板轡と杏葉、車文・格子文楕円形鏡板轡と杏葉、棘葉形鏡板轡と杏葉、花形鏡板轡と杏葉、唐草文・鳳凰文透彫心葉形鏡板轡と杏葉はいずれも後期三段階以降、生産・流通が盛行する系列群である。

なお、鈴杏葉は後期二段階まで生産・流通が盛行する系列であるが、これを含むセットには、同時期のその他の三系列



1・2 金鈴塚古墳B 3・4 下石橋愛宕塚古墳a

図16 四畝組緒繫実測図 (S=1/4)

群ほどの縁飾付織物巻繫との相関は確認できず、素繫などとの相関が確認できる。同様に素繫はf字形鏡板轡や劍菱形杏葉とも相関が確認できる。表1では鏡板轡や杏葉の各系列群の型式ごとの繫との相関は示してはいない。しかし、f字形鏡板轡と劍菱形杏葉の系列から構成されるセットにおいては、中期六段階から後期一段階にかけてのセットに素繫が多く採用されているため、この系列に用いられる繫の時間的な変化を示している可能性がある。一方、十字文楕円形鏡板轡と三葉文楕円形杏葉、鐘形鏡板轡と杏葉の系列から構成されるセットに素

表1 鏡板・杏葉の各系列と繫の相関

繫の種類 鏡板・ 杏葉の系列	折返繫									組緒繫	
	素	縁飾付	織物巻	織物巻 の確認	縁飾付 織物巻	皮革紐 補助縫	組紐 補助縫	別材巻	装飾 紐付	二畝	四畝
f字形・劍菱形	22		2	5	13						
十字文楕円形・ 三葉文楕円形				4	10				1	1	
鐘形			1	8	5						
鈴杏葉・ その他鈴付馬具	6	2		1	1					1	
十字文透心葉形 鏡板とその祖型	1	1				1				1	
三葉文心葉形			1	1					1		
車文楕円形・ 格子文楕円形	1			1							2
棘葉形							1		1		
花形								2			2
透彫心葉形	1					1	1		1	2	
その他の装飾 馬具				2	2	1			1	3	
鉄製環状鏡板轡	3										5
計	34	3	4	22	31	3	2	2	5	15	2

「織物巻の確認」は織物巻繫もしくは、縁飾付織物巻繫のどちらかであると思われるが、本文中で述べたように縁飾付織物巻繫に該当する事例が多いと思われる。

鏡板と杏葉の系列が異なる場合、また、一つのセットに異なる繫が用いられる場合（江子田金環塚古墳例等）は重複して集計している。

ここまで鏡板轡や杏葉など金属製馬具とのセットにおける繫の様相をみてきた。セットの編年的位置づけに基づいて消長をまとめたのが図17である。⑭参考までに段階ごとの繫の推移を表2に示す。中期五段階から中期六段階にかけては、これまでのところ、素繫のみしか確認できない。中期七段階になると縁飾付繫、縁

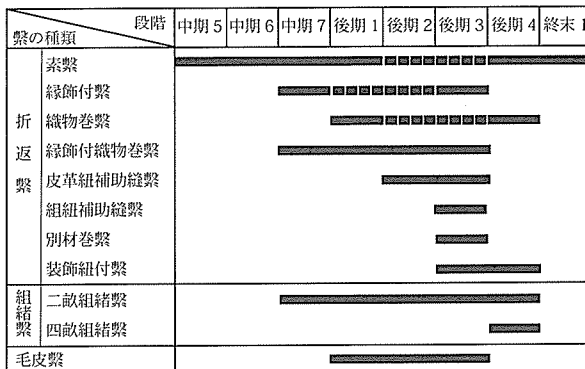
繫が確認できないのは、これらの系列が、f字形鏡板轡や剣菱形杏葉の系列よりも遅れて出現するためであろう。同様の分析は、今後、後期三段階以降に盛行する鏡板轡と杏葉についても繫の確認事例が増えれば詳細におこないうる。現状では、後期三段階までの三系列群と縁飾付織物巻繫との間の強い相関は、後期三段階以降新たに生産が開始される鏡板轡・杏葉との間には確認できないことを指摘しておく。

4 繫の消長

表2 段階ごとの繫の推移

繫の種類		段階							計	
		中期5	中期6	中期7	後期1	後期2	後期3	後期4		終末1
折返繫	素繫	6	8	2	12			3	2	33
	縁飾付繫			2			1			3
	織物巻繫				2			1		3
	織物巻の確認				1	5	8			14
	縁飾付織物巻繫			1	9	13	5			28
	皮革紐補助縫繫					1	2			3
	組紐補助縫繫						1			1
	別材巻繫						2			2
組緒繫	裝飾紐付繫						2	2		4
	二畝組緒繫			1	1	1	5	6		14
	四畝組緒繫							2		2
	毛皮繫				4	1	2			7

繫の確認できた各種馬具の帰属するセットの編年的位置づけにより集計



現状で確認できる各繫の消長を示し、資料数は反映しない。
 ■…現状では確認できないが、前後の状況から存在が想定される。

図17 繫の消長

飾付織物卷繫、二畝組緒繫が出現する。縁飾付織物卷繫は後期三段階にかけて盛行する。後期三段階以降になると繫の確認できる良好な資料は少ないが、多数の種類が出現し、採用されている状況をもてとることができる。これより、中期七段階以降における装飾性を追加した縁飾付織物卷繫の出現と、後期三段階以降の縁飾付織物卷繫の減少とあらたな種類の繫の出現は繫の変遷におけるあらたな動向と評価できよう。

- ① 内山敏行「古墳時代の轡と香葉の変遷」(一九六特別展黄金に魅せられた倭人たち)、一九九六年。
- ② 岡安光彦「いわゆる「素環の轡」について——環状鏡板付轡の型式学的分析と編年——」(前掲)。
- ③ 内山編年と田辺昭三による須惠器編年とのおおよその対応関係を示すことも可能であり、中期三段階がTK七三型式期、中期四・五段階がTK二一六→TK二〇八型式期、中期六・七段階がTK二三→TK四七型式期、後期一段階がMT一五→TK一〇型式期、後期二→後期四段階がMT八五→TK二〇九型式期、終末期一段階が飛鳥I期新相に対応する。田辺昭三『須惠器大成』(一九八一年)。
- ④ 松尾充晶「上塩冶築山古墳出土馬具の時期と系譜」(『上塩冶築山古墳の研究』、一九九九年) 一五九—一六〇頁。
- ⑤ 高久健二「馬具」(『番塚古墳』、一九九三年) 一五九頁。
- ⑥ 現状では中期七段階の資料として石光山八号墳例がある。千賀久「石光山八号墳」(『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三二冊、一九七六年) 八—一八二頁。角山幸洋「石光山八号墳の馬具付着織物片の観察所見」(前掲)。
- ⑦ 兵庫鎮立開の鉄製環状鏡板轡のセットのうち、栃木県小野果根四号墳、豊田大塚古墳、王墓山古墳などの鉄製鉢状雲珠や辻金具、無脚雲珠を観察したが、いずれも素繫や毛皮繫などの可能性が考えられる。
- ⑧ 李恩碩「고대 동북아시아계 (繫) 에 관한 연구」(前掲) 一一七一—一八頁をもとに、掲載された写真で判断した。
- ⑨ 鹿野吉則他「馬具」(『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』、一九九〇年)。
- ⑩ 岩原剛・堀哲郎・宮原祐治「金銅装馬具」(前掲)。山田卓司・小村眞理「金銅装馬具を科学する」(前掲)。
- ⑪ 飯塚三二号墳例は二畝組緒繫が連結された貝装八脚雲珠のセットとして、環状鏡板轡、三鈴香葉があるが、環状鏡板轡は報告書作成段階で所在は不明であるが矩形の立間が付くものであるらしい。鈴木一男「飯塚古墳群Ⅲ」(『遺物編』、小山市文化財調査報告書第四四集、二〇〇一年) 一三〇頁。ここでは、三鈴香葉や貝装雲珠から位置づけをおこなった。
- ⑫ 御崎山古墳例は二畝組緒繫が連結された雲珠や辻金具のセットとして、岡安編年Ⅲ段階の立間に吊金具が連結された小型矩形立間環状鏡板轡が出土している。大谷晃一「御崎山古墳の研究」(八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ、一九九六年) 二二—二四頁。
- ⑬ 稲葉昭智「金鈴塚古墳展——甞る東国古墳文化の至宝——」(二〇一三年) 二五頁による。
- ⑭ 図15で示した消長は、日本列島の古墳時代馬具に基づくものである。織物志繫の池山洞四四号墳主柩aは中期六段階に該当する。諫早直人「東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究」、二〇二二年。

おわりに

ここまでの検討により以下のことが明らかになった。一点目としては、日本列島で採用された繫の多様性である。本稿では、金具に残された繫の観察に基づき、基本となる製作技術の違いから、折返繫と組緒繫の二系列に大別し、装飾により一種類の繫を確認した。

二点目として、後期二段階から後期三段階にかけての鏡板轡や杏葉の系列の変化と用いられた繫の変化には連動性が想定される。後期二段階から後期三段階にかけては、鏡板轡や杏葉などに限らず、新系列の鞍や壺鐙の定着^①、金属製馬具の大きな変化がみられる。この変化の歴史的背景は、生産と流通体制の変化、舶載品ラッシュ^②以後の馬具の系譜の混交、装飾馬具に担わされた機能の変化の三つの側面から考える必要があるだろう。

また、繫の資料的特質は以下のような可能性をもつ。まず、繫の装飾馬具としての一面性が確認できれば、これまで金属製馬具で指摘されてきた大きさや色調の変化と、繫とそれらとの連動性について検討を加えることができる。繫にはしばしば織物や漆などの有機質製品が用いられるため、金属以外の色調や質感がどのように装飾馬具の変化と関係しているかという新しい視点で研究を進めることができる。次に、馬具の系譜の問題と、朝鮮半島などの馬具の系列が列島内で模倣生産されるプロセスについて検討することができる。千賀によりこの視点の研究は先鞭がつけられているが、繫の連結方法や吊金具と繫の種類との相関の有無の検討により、詳細に迫ることができるであろう。最後に、各系列の鏡板轡や杏葉、雲珠や辻金具の生産がどのような関係のもとに行われ、セットが構成されているかという点について具体的に検討を加えることが可能になる。繫は個々の馬具を連結する馬具であることから、鏡板轡や杏葉、雲珠や辻金具との相関関係を通時的、共時的に検討することによって、馬具のセットがどのような背景により構成されたかについて考察を進めることが可能になると考えられる。

① 内山敏行「馬具」(副葬品の型式と編年)古墳時代の考古学四、二〇一三年) 二二五—二三五頁。

② 内山敏行「裝飾付武器・馬具の受容と展開」(馬越長火塚古墳群、二〇一二年)。

③ 千賀久「馬具に使用された革帯——藤ノ木古墳金銅製馬具の特殊性——」(前掲)。

【謝辞】本稿は二〇一四年一月に京都大学大学院文学研究科に提出した修士論文を再構成したものである。修士論文の作成にあたり、上原真人先生、吉井秀夫先生に懇切なご指導を賜った。諫早直人氏には日頃からご教示、ご助言を賜っている。弊の研究については李恩碩氏に、縁飾の研究については小村真理氏からご教示を賜った。口頭発表において、上野祥史氏、内山敏行氏、田中裕氏、中村潤子氏、古川匠氏よりご教示・ご指摘を賜った。

資料見学などにあたり、左記の方々・機関から多大なご配慮を賜った。記して感謝申し上げます。(敬称略)五十音順) 秋山隆雄 阿刀弘史 安部百合子 荒井世志紀 荒川史 有井宏子 猪狩俊哉 池谷初恵 市田佳奈子 市元皇 伊藤美鈴 稲葉昭智 井村広巳 岩崎しづ 岩原剛 岩本克昌 内田真雄 梅本康弘 大熊茂弘 太田正和 大坪州一郎 大野究 大森信宏 岡本晃明 岡本一秀 奥野和則 押切智紀 尾島忠信 小村真理 香川慎一 加川崇 榎村友延 片平雅俊 加藤和哉 金澤雄大 河合修 河野一隆 川又隆一郎 岸本裕子 北島恵介 木對和紀 城門義廣 木原光 木許守 具知慧 倉地啓仁 小池浩平 小泉裕司 古後憲浩 小林健二 駒宮史朗 佐伯英樹 佐伯純也 佐伯昌俊 阪口英毅 坂田崇 坂本豊治 坂元雄紀 佐藤隆 篠宮正 下高瑞哉 鳥孝寿 清水篤 白石華子 進村真之 鈴木一男 鈴木敏則 杉本和江 住吉茂樹 清喜裕二 高木清生 高島好一 高橋信一 高畑富子 高見

哲士 田上勇一郎 高田健一 高屋茂男 田口一郎 田中祐樹 千葉隆司 辻田淳一郎 土屋隆史 寺嶋昭洋 徳網克己 永江寿夫 中門亮太 中島皆夫 中島雄二 永田稲男 中西克宏 中野知幸 中村大介 中山 愉希江 名倉聡 西村美幸 西本安秀 如法寺慶大 初村武寛 花谷浩 濱口英之 原田保則 坂靖 樋口めぐみ 福山博章 兵頭勲 平山誠一 藤井太郎 藤田浩明 古谷毅 細野欽也 前原豊 益田雅司 松浦暢昌 松尾尚哉 松尾佳子 松下善和 松田朝由 松本太郎 三浦和信 水村伸行 三谷光明 三宅正浩 宮嶋雅充 宮本一夫 宮本佳典 村上由美子 森嶋秀一 森村健一 森本徹 矢口翔馬 柳世莉 山口博之 山口裕平 山中英彦 山本一伸 横須賀倫達 吉澤則男 李在煥 渡邊文口 赤磐市教育員会 朝来市教育員会 伊賀市教育員会 伊豆の国市教育員会 市原市埋蔵文化財調査センター 市立市川考古博物館 伊都国歴史博物館 今城塚古代歴史館 いわき市教育員会 いわき市教育文化事業団 磐田市教育員会 宇治市都市整備部 宇美町教育員会 愛媛県歴史博物館 大川広域行政組合 大阪府教育員会 大阪府立近つ飛鳥博物館 大阪文化財研究所 岡山県古代吉備文化財センター 小城市教育員会 小山市教育員会 御前崎市教育員会 各務原市埋蔵文化財センター 掛川市教育員会 加古川市教育員会 かつすみがうら市文化課 香取市教育員会 木更津市郷土博物館金のみず 木津川市教育員会 九州国立博物館 九州大学考古学研究室 九州歴史資料館 京都大学総合博物館 富内庁書陵部 鞍手町教育員会 群馬県立歴史博物館 桂川町教育員会 慶北大學校博物館 神戸市埋蔵文化財センター 広塚町教育員会 國學院高等学校 御所市教育員会 埼玉県立歴史と民俗の博物館 堺市立泉北すえむら資料館 山口市教育員会 滋賀県立安土城考古博物館 静岡県埋蔵文化財センター 鳥根県立古代出雲歴史博物館 鳥根県立八雲立つ風土記の丘 城陽市教育員会 吹田市教育員会 杉戸町教育員会 普通寺市教育員会 高

- 崎市教育委員会 高島市教育委員会 武雄市教育委員会 千葉県立中央博物館 鳥栖市教育委員会 栃木県立博物館 栃木市教育委員会 鳥取市教育委員会 豊田市教育委員会 豊橋市文化財センター 長岡京市埋蔵文化財センター 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 奈良国立博物館 南山大学人類学博物館 羽咋市教育委員会 羽曳野市教育位以内浜松市博物館 東大阪市立郷土博物館 東松山市埋蔵文化財センター 日立市郷土博物館 水見市教育委員会 兵庫県立考古博物館 広島県立府中高等学校 広島県立歴史博物館 福井県立歴史博物館 福岡市埋蔵文化財センター 福島県文化財センター 白河館 文化庁 前橋市教育委員会 牧之原市教育委員会 益田市教育委員会 松阪市教育委員会文化課 松山市北条ふるさと館 真庭市教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 向日市教育委員会 森町教育委員会 八尾市立歴史民俗資料館 野洲市歴史民俗博物館 山形県立博物館 山津照神社 山梨県立考古博物館 行橋市教育委員会 米子市教育委員会 米子市埋蔵文化財センター 粟東市体育協会 若狭町歴史文化課 和歌山市立博物館 早稲田大学會津八一記念博物館
- なお、本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費(課題番号・二六・三九五〇)の成果の一部である。
- 図版出展〔 〕は所蔵機関
 以下、出典を記さず〔所蔵機関〕は筆者実測・撮影。
- 図1・6・7・17…筆者作成
 図2…1・2―〔朴天秀他「高霊池山洞四四号墳―大伽耶王陵―前掲〕再トレース。
 図3…1―〔豊田市教委〕。2―〔松尾充晶「馬具」『めんぐる古墳の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書四二、二〇〇九年〕再トレース。
- 図4…1・2・6―〔市原市埋蔵文化財センター〕。3―〔掛川市教委〕。4―〔栃木県立博物館〕。5―〔愛媛県歴史博物館〕。7―〔山津照神社〕。8―〔奈良県立橿原考古学研究所附属博物館〕。
 図5…1・2―〔市原市埋蔵文化財センター〕。3・4―〔富若市教委〕。5―〔文化庁〕。6―〔奈良国立博物館〕。7―〔京都大学考古学研究室〕。8―〔鳥取市教委〕。
 図8…1―〔鈴木敏則他「葦山町多田大塚古墳群」『静岡県の前方後円墳』個別報告編、静岡県文化財調査報告書第五五集、二〇〇一年〕再トレース。4―〔永沼「馬具」前掲〕再トレース。3―〔花谷「馬具」前掲〕をもとに資料を実見の上、一部改変トレース。4―〔杉戸町教委〕。5・6―〔國學院高等学校〕。7・8―〔桃崎祐輔「馬具」『風返稲荷山古墳』、二〇〇〇年〕をもとに資料実見の上、一部改変トレース。9―〔小城市教委〕。10―〔京都大学文学部考古学研究室保管〕。11―〔早稲田大学會津八一記念博物館〕。
 図9…1・2―〔文化庁蔵・和歌山市立博物館保管〕。1の下―〔樋口・西谷・小野山「馬具」前掲〕再トレース。3―〔松尾「馬具」前掲〕再トレース。
 図10…1―〔高久「馬具」前掲〕をもとに資料を実見の上、一部改変トレース。2・3―〔奈良県立橿原考古学研究所附属博物館〕。4―〔永沼「馬具」前掲〕再トレース
 図11…1―〔片山健太郎・初村武寛「王墓山古墳出土馬具について」『旧練兵場遺跡・王墓山古墳・岡古墳群・善通寺旧境内』二〇一四年〕再トレース。2―〔愛媛県歴史博物館蔵〕。3―〔市原市教委一九八五年〕再トレース。4―〔山口裕平「馬具」『福岡県京都郡における二古墳の調査―箕田丸山古墳及び庄屋塚古墳―』福岡大学人文学部考古学研究室調査報告第三冊、二〇〇四年〕再トレース。5―〔森下・高橋・吉井「副葬品の再検討」前掲〕をもとに資料実見の上、一部改変トレース。

6―〔大阪府立近つ飛鳥博物館〕。7―〔高槻市今城塚古代歴史館〕。8―〔大阪府教委〕。9―〔山武市教委〕。10―〔福岡県教委〕。11―〔諫早・片山「ゴーランド・コレクションと絵師遠藤茂平」鹿谷一八号墳出土花文付雲珠・辻金具の紹介〕前掲より。

図12・1―〔宮若市教委〕。2・4―〔鹿野吉則他「馬具」前掲〕。再トレース。3―表面〔宮代栄一「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学』第七〇号、一九九五年〕。再トレース。―裏面〔李恩碩「고대 동북아시아계 (繫) 에 관한 연구」前掲〕の写真よりトレース。

図13・1―〔宮若市教委〕。2―〔高崎市教委〕。

図14・1―〔奈良国立博物館〕。2―〔奈良県立橿原考古学研究所附属博物館〕。3―〔栃木県立博物館〕。4―〔岩原・堀・宮原「金銅装馬

具」前掲〕。再トレース。

図15・1―〔文化庁蔵、和歌山市立博物館保管〕。2―〔京都大学総合博物館〕。3―〔小山市教委〕。4―〔出雲弥生の森博物館〕。5―〔東松山市埋蔵文化財センター〕。6・7―〔市立市川考古博物館〕。8―〔渡辺正気・横田義章他「新延大塚古墳」鞍手町文化財調査報告書第三集、一九八五年〕をもとに資料実見の上、改変トレース。9―〔小城市教委〕。10―〔島根県立八雲立つ風土記の丘資料館〕。

図16・1・2―〔稲葉「金鈴塚古墳展」魅る東国古墳文化の至宝〕前掲〕を参考に〔宮代栄一「金鈴塚古墳出土馬具の研究補遺」『金鈴塚古墳研究』第三号、二〇一五年〕を再トレース。3・4―〔栃木県立博物館〕。

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

A Fundamental Study of Horse Straps, *Gai* 繫,
in the Middle and Late Kofun Period

by

KATAYAMA Kentaro

During the Kofun period, a culture of horse riding was adopted by elites. We can recognize this phenomenon from horse trappings found in *kofun* burial mounds; however, we can find only fragments of such horse trappings due to corrosion.

Horse trappings comprise fragments of cheek bits, strap unions, saddles, stirrups, crupper strap unions, and pendants. If we equip a horse with these parts, we must join them with many straps. These straps, known as *gai* 繫, are important in equipping a horse with various horse-related ornaments. However, in many excavations that found traces of horse trappings, corrosion and deterioration have left such straps barely recognizable. In recent years, archaeological observations have paid increasing attention to these little pieces of evidence that comprise metal parts, and we can now find clues that allow us to reconstruct both the techniques and materials that were used for horse straps during the Kofun period. However, such studies are sparse and few at present.

This paper establishes a chronology and a means for the classification of horse straps. First, I examined the techniques and materials that were used for making horse straps. By examining many cheek plates, strap unions, crupper strap unions, and pendants, I was able to classify the two basic techniques used for making horse straps. One was through a double layering technique, and the other was through braiding. In the case of double layering, many supplemental decorative techniques were used such as, textile wrapping, rim decoration with stiches, supplementary stitching, wrappings with unidentified materials, and the attaching of decorated strings.

Second, I classified the horse straps into 12 types by identifying different techniques and materials used. I further classified the double layering technique into nine types: normal, textile core, stitched, textile wrapped, stitched and textile wrapped, leather stitched strings, braided stitched

strings, straps wrapped with unknown material, and those with decorative strings attached. Next, I classified the braiding of straps into two types: two-ribbed braided straps and four-ribbed braided straps.

Third, I examined these various types of horse straps and identified which types of trappings they were joined to. This included cheek plates, strap unions, crupper strap unions, and pendants. The normal type was used from the 5th stage of the Middle Kofun period to the 1st stage of the Final Kofun period. It was found that they were joined to many types of cheek plates or pendants. For example, they were attached to f-shaped cheek plates, sword-shaped pendants, bells with pendants, palmette and phoenix-motif, heart-shaped cheek plates and pendants, and simple circular iron cheek plates. The stitched type was confirmed in three locations, such as the Kami-Enyatsukiyama Kofun 上塩冶築山古墳 A. The textile-wrapped type was also confirmed in three locations, such as Bakuya Kofun 牧野古墳 A. Stitched and textile-wrapped types were, however, confirmed in many locations. These were used from 7th stage of the Middle to 3rd stage of the Late Kofun period, and they were joined to f-shaped cheek plates, sword-shaped pendants, cross-motif oval cheek plates, three-leaf oval pendants, bell-shaped cheek plates, and bell-shaped pendants. Leather-stitched strings were confirmed in three locations, such as Takehara Kofun 竹原古墳 b. Braided-stitched strings types were confirmed only in Fujinoki Kofun 藤ノ木古墳 A. Meanwhile, string-wrapped with an unidentified material type was confirmed in Takehara Kofun 竹原古墳 a. Decorative string-attachment types were confirmed in Tamakiyama No. 3 tumulus 珠城山3号墳 etc. This type was used during the 3rd and 4th stages of the Late Kofun period.

On the other hand, two-ribbed braided straps were confirmed in many locations. For example, in the case of Kamo-Inariyama Kofun 鴨稻荷山古墳, it is possible to recognize cross-motif oval cheek plates and three-leaf oval pendants. In other cases such as that of Ipponmatsu No. 1 tumulus 一本松1号墳, the straps were joined to phoenix motif heart-shaped cheek plates and pendants. The two-ribbed braided strap was used from the 7th stage of the Middle until the 4th stage of the Late 4 Kofun period. Four-ribbed braided straps were confirmed in two locations, Kinreizuka Kofun 金鈴塚古墳 B, and Shimo-Ishibashi Atagozuka Kofun 下石橋愛宕塚古墳 a. In both cases, four-ribbed braided straps were connected to flower-shaped cheek plates and pendants. Both cases belong to the 4th stage of the Late Kofun period.

Fourth, I examined the use of horse straps based on the result of these analyses. By engaging in such examinations, I suggested that the three main

types of cheek plates and pendants, f-shaped cheek plates, sword-shaped pendants, cross-motif oval cheek plates, three-leaf oval pendants, bell-shaped cheek plates, and bell-shaped pendants, tended to be joined by stitched and textile wrapped straps. Various cheek plates and pendants, which were adopted from the 3rd stage of the Late Kofun period, tended to be joined by many types of straps.

I therefore concluded that the change in strap types, which were used to join cheek plates and pendants, was linked to changes in many other metal parts such as cheek bits, strap unions, crupper strap unions, and pendants. Furthermore, I concluded that the historical background of this change involved three causes: 1) the changes in the systems of horse trapping production and distribution, 2) the mixture with many new types of imported parts, and 3) the changes in the symbolic systems supported by decorated horse trappings.

Joseon-Japan Relations as Informed by Joseon Missions to Ming and Qing China

by

CHENG Yongchao

Joseon missions to Japan (Ko. *Joseon Tongsin*) were goodwill missions sent intermittently by Joseon Dynasty Korea at the request of the Japanese *bakufu* authorities. During the Edo period, these missions were dispatched to the Tokugawa shogunate 12 times between 1607 and 1811. The Joseon Dynasty was during this period a vassal state of Ming China before 1637, and then of Qing China after 1637.

In consideration of the early-modern diplomatic principle in East Asia that “the minister of a prince had no intercourse outside his own state” (Ch. *Ren chen zhe wu wai jiao* 人臣者無外交), the Joseon Dynasty, as a vassal state, should have been prohibited from building any diplomatic relationship with Tokugawa Japan without the permission of the suzerain. Nonetheless, there has been little research on the whether and how the suzerain-vassal relationship between Ming and Qing China and Joseon Korea impacted the relationship between Joseon Korea and Japan, not to mention the impact on